

浮遊学園のアリス&シャリー ①

むらさきゆきや

 OVERLAP



それらは教室の天井が崩れたときに落ちてきたらしい。
 部屋には柎貴と、もう一人しかいなくて、幸いなことに怪我人は出なかったけれど、ならべられていた机や椅子は踏まれて潰れてぺしゃんこで、元の形がわからない物になっていた。

現実ではありえない存在ばかりだった。まるで童話からこぼれてきたかのよう。
 それらは教室の天井が崩れたときに落ちてきたらしい。
 部屋には柎貴と、もう一人しかいなくて、幸いなことに怪我人は出なかったけれど、ならべられていた机や椅子は踏まれて潰れてぺしゃんこで、元の形がわからない物になっていた。

天井が落ちてきた。
 金色の陽光が教室の窓から差しこんでいる午前八時十三分。
 楠木柎貴はたちこめる粉塵に口元を押さえ、うつすら目を開く。
 砕けた天井の瓦礫と、上の階の教室にあった机や椅子や床材が散乱していた。
 そのなかで奇妙な影が踊っている。



教室崩壊



プロローグ	教室崩壊	003
第1章	浮遊学園都市	006
第2章	契約	046
第3章	アリスの部屋	094
第4章	スターブラスト・シャリー	166
第5章	規律委員会	200
エピローグ	紅茶日和	266

Presented by
 Yukiya Murasaki
 Illustration by
 Shirabii

トランプの兵隊や帽子をかぶったネズミなど、非常識で不条理で無気味な存在たちの中に巨大な猫がいる。体長六メートルくらい。ふさふさした毛におおわれた丸い頭の天辺は、底の抜けた階間の上まで届いていた。

アーモンド形の目を細め、ニンマリ笑う大猫が、おじぎするみたいに頭を下げる。ふたつの三角耳の間に——人影があつた。

その人物の異質さは、瓦礫のなかで踊る奇妙な存在たちとは別の意味で際立っていた。柗貴は息を呑む。

状況を忘れて見とれてしまうほど、綺麗だ、と思った。

西洋人形みたいな女の子だった。

サファイアのように青く澄んだ瞳に、金糸を束ねた髪。石膏像のごとく肌が白い。ゆっくり動く大猫の頭に乗って、ふさふさの三角耳にしがみついていた。

女の子のほうが柗貴より背は低けれど、ずっと高い場所にいるから見上げる形になる。彼女が周りを見渡して——柗貴と目が合った。

不思議そうに小首をかしげられる。

「……あなたは、だれ？」

透明な水のような透き通った声だった。

「ええっと、ぼくは、楠木柗貴……今日、転校してきたんだ」

「そう。ちょっと驚かせてしまったかしら」

「すごく驚いたよ。自分がおかしくなつたかと思つたくらいね——きみは、いったい？」

「……かわいそう」

質問への回答はなく、代わりに彼女は憐憫を口にした。

柗貴は戸惑って聞き返す。

「ぼくが？ どうして？」

「……そこにいると、死んでしまうもの」

「えっ!？」

かすかな風切り音を耳にして、柗貴は振り返る。

窓の外に——



浮遊学園都市



転校初日、午前七時二十二分。

柎貴は浮遊学園都市《楽園》に降り立った。

「ふう、暑いなあ……」

エアコンが効いた駅のロビーから自動ドアをくぐって出ると、途端に空気が首筋にまわりつついてくる。

空を見上げると、ギラギラと音が聞こえてきそうなほど太陽が輝いていた。そして、雲が近い。

「おお、さすがは浮遊都市だ！」

この学園は高度千メートルに浮かんでいる巨大な街だ。総面積は二十四平方キロメートルという東京都の区をひとつ浮かべたくらいの広さがある。

唯一の玄関となるのは空中列車の駅だけ。

そのメインゲート前は、噴水のある広場になっており、デパートや飲食店や娯楽施設のビルへと歩道が伸びていた。楽しげで賑やかな場所だ。

歩道や広場などは全て二階の高さにあり、車両は下層の地表階を行き交っている。歩車

が完全分離されているのは、この時代でも珍しい最先端の構造だった。

つつい、柎貴の視線は駅前の洒落た喫茶店に向いてしまう。

——キンと冷えたアイスティーなんて最高だろうな。

いや、約束の時間はすぐだ。

柎貴は誘惑を振り切り、駅前の見物もそこそこにして、待ち合わせ場所を探した。

「えっと……三角形のモニュメント？」

見当たらない。

会う約束をした相手は、幼馴染みだった。

七年前、先にこの学園へ転校した女の子で、小学校では同じクラスだった。よく一緒に遊んだものだ。

彼女は誰よりも木登りが上手く、泳ぐのが速く、臆せず男子とケンカするような女の子だったが、もう互いに高校生である。

さぞ女性らしくなっているだろう——と考えると、柎貴は幼馴染みに会うのが楽しみのような、気恥ずかしいような複雑な心境になるのだった。最初の挨拶はどうしようか？ タタタタタ……と駆ける足音が近づいてくる。

「ん？」

「柎貴——！！」

視界が白色でおおわれた。むぎゅっ、とやわらかいものが顔に当たる。

クツション!?

おおきくて、やわらかくて、まるっこい。

そして、ぐぐっと重みがかかってきた。

頭を押さえつけられて、柗貴はようやく自分が抱きしめられていることに気付く。

「息が……!？」

「ふにゃあ!! ほんものだよお。ほんものの柗貴だよお!!」

「く、くるし……!」

「この二オイ、懐かしいなあ」

「ふがっ、がっ……!？」

「あれ? 柗貴、どうしたの? なんか言ってるよ?」

「死又……!」

「ええっ!？」

ぐったりしたところで、ようやく彼女が両腕を離してくれた。

口と鼻をおおっていたやわらかいふくらみから、顔面が解放される。

ふはあ……と柗貴は深く呼吸した。

「空気、美味しいなあ」

「あ、そうでしょ。この学園は海の上にあって、しかも、排ガスが出るクルマは禁止されてるから」



「そういう意味じゃないんだけどな。はは……思ったより変わってなくて安心したよ。ひさしぶりだね、シャーリー」

「にははっ、ひさしぶり、柗貴！ あ、でも、変わってないってことはないと思うけどな。ほら、いろいろ違うでしょ？」

見せつけるように少女は胸を張る。

幅広のネクタイと大きな襟のある半袖ブラウスト、赤いチェックのプリーツスカートという制服姿だった。

子どもの頃には短くしていた髪は腰まで伸びていて、睫毛も長く、手足はスラツとして

いる。なにより、女性らしい胸のふくらみが、他を圧倒するボリューム感で存在を主張しまくっていた。

ズドンという感じである。

これは血筋か？

彼女は名を、桜坂シャーリーといい、母親はアメリカ人らしい。

「……たしかに、育ったね」

「でしょ!? 三十センチも大きくなったんだから！」

「セ、センチで言われても、元を知らないけど」

「んとね、今は一五九センチになったかな。柗貴は？ あたしより高くなったねえ」

シャーリーが手を伸ばしてきて、柗貴の頭をなでまわした。

盛大な勘違いに気付いて、思わず赤面する。

「あ、ああ、身長か！ そうか、身長の話だよね、うん」

「んに？」

「ぼくのほうは——」

おしゃべりをしながら。

柗貴は、すでに七年もこの街に住んでいるシャーリーに案内してもらって、学校へと向かう。

いや、ここは浮遊学園都市カナンだ。すでに学校には踏み入れている。

柗貴たちが向かうのは、この街にある巨大な校舎のひとつだった。



駅前から自動運転のバスに乗って、十五分——《第十三校舎前》のバス停で降りた。

シャーリーに腕を絡められ、柗貴はぐいぐい引っぱられる。

「ほら、ここだよ！」

彼女のやわらかさや体温が伝わってきて、どうにも落ち着かない。

「わ、わかった。はぐれないから。大丈夫だから」

周囲は登校する生徒たちで溢れかえっていた。みんな同じ制服姿をしている。新顔である柗貴と、その腕を抱くように持っているシャーリーは、他の人たちから奇異な目を向けられた。

「柗貴、もうクラスは聞いている？」

「いや。これから職員室で教えてもらうと思う。というか、なにも聞いてないんだよ。資料を渡されたけど、ちよつと目を通したくらいじゃ、意味がわからなかったし……」

「そうなんだ。あたしのクラスは二年A組だよ。四十五階にあるの」

「へえ……つて、四十五階!？」

「うん。第十三校舎は六十階まであってね。一番上の学食とか、すごく景色がいいよ」指さされた目の前のビルを見上げる。

一階に玄関があり、二階、三階と階段状になっていて、四階より上はガラス張りの高層ビルがそびえ立っていた。

「これ、全部、教室なのか!? なんか学校とは違う会社のビルかと思った」

「あははっ。二十九階までが特別教室で、三十五階までが先生の部屋で、四十階までが一年、四十五階までが二年、五十階までが三年の教室だよ」

「は……五十一階から上は?」

「学食!」

「そいつは、すごいなあ」

「小学校や中学校も、こんな感じ。あたしも転校してきたときは驚いたけど、すぐ慣れるよ」
「だといけど……ところで、シャーリー、そろそろ腕を離さない?」

「なんで?」

「いや……ちよつと恥ずかしくないか? 周囲の視線が……」

彼女は屈託のない笑顔を浮かべている。

「にははっ、気にしすぎだよ、柗貴!」

「そ、そうかな?」

自分が意識しすぎなのだろうか、と柗貴は思う。

「ほら、行こ!」

「あ、ああ」

玄関をくぐって、駅のコンコースかというほど広い通路を抜けると、さらに広大なホールに出た。
ここが高層ビルの中心部になるらしい。

ホール中央に円形の柱というか、曲線を描く壁がある。《ELEVATOR PILLAR》と書かれた壁に、エレベーターがいくつも並んでいた。

次々と生徒が入っていく。

「たくさんあるなあ」

「でも、けっこう待つんだよ? とくにお昼休みとか」

「それだけ生徒も多いわけか」
 「大きな柱の周りにエレベーターがついてるから、一方に行列ができて、反対側はガラガラなんてこともあるし」

「はは……なるほど」

「階段もあるよ?」

「ああ、そうなんだ。職員室って何階にあるんだっけ?」

「三十階!」

「いやいや、それ大変すぎるでしょ」

「んと、階段は校舎の東ブロックと西ブロックに、それぞれ二つずつあってね」

「どうして階段を使うみたいな流れになってるの!？」

「え? ……そこに階段があるから?」

「登山じゃないんだから」

エレベーターを待っていると、背後で「なっ!？」と誰かが鋭い声をあげた。

振り返ると、男が目を見開いている。

体格のいい体育会系といった感じの男で、短く切りそろえた髪と、角張った顔が、いかつい印象を与える。その視線は、柗貴とシャーリーに向けられていた。

絞り出すように言う。

「さ、桜坂さん! 誰だ、そいつは!？」

「ん? 柗貴だけど」

説明する氣力に欠ける返答だった。いろいろな言葉足らずなので、付け足しておく。

「ぼくは楠木柗貴。今日、転校してきたんだ」

「転校生だと? それじゃあ、覚醒かせいしたばかりかよ。そんなやつが、桜坂さんと、う、腕

を……」

わなわな、と肩を震わせる。

「あの……彼は?」

「威昌沼いじやうぬまって言って、あたしと同じクラスの人だよ。それだけ」

「桜坂さん、それだけってことはないだろ?」

「それだけでもん」

「ふっ、相変わらずつれないな」

威昌沼は、シャーリーに対しては親しげな態度を見せるが、柗貴に向かっては強烈な敵意を放っていた。今にも殴りかかってきそうなほどに。

「——それで? お前は、桜坂さんのなんだってんだ?」

初対面だというのに、すっかり喧嘩けんか腰だ。

柗貴は辟易へきえきしてしまう。

「ただの幼馴染みだよ……あのさ、シャーリー、やっぱり、こういうのは誤解されると思っ
うんだ」

やんわりと、腕をほどく。

彼女は残念そうにしつつも従ってくれた。

しかし、それくらいでは、威昌沼の怒りは収まらなかった。むしろ目を血走らせる。

「な、名前を呼び捨てに……ッ!? オイ、お前な! ちよっと前から知り合いだからって、桜坂さんに馴れ馴れしくしたら迷惑だろうが!」

「そういうつもりはないんだけど」

「桜坂さんも! そんな、今さら覚醒したようなレベルの低いやつ、仲良くしてやることないって」

威昌沼の言葉に、シャーリーがムツとした顔をする。

「なにそれ? 仲良くする相手をレベルで選ぶなんて変じゃない?」

「ぐっ!」

「行こう、柎貴。階段でいいよね」

「仕方ない、か」

相手が誰であろうと衝突するのは苦手だ。三十階まで階段を上るのは大変そうだったが、柎貴はそちらを選ぶことにした。

ギリッ、と威昌沼が歯齧みする。

姿が見えなくなるまで、彼は柎貴のことを睨み続けていた。



「ごめんね、柎貴。なんか、変な感じになっちゃって」
階段を上りながら話す。

「気にしてない。シャーリーが悪いわけじゃないし。ちよっと普通じゃないと思うけど、彼はクラスメイトってだけなんだろう?」

「もちろん!」

相手のほうは、そう思っていない様子だったが。

シャーリーが頭をかかえる。

「一年のときに、威昌沼からパートナーにならないかって誘われたんだよねー」

「えっ!? お付き合いとかが、そういう?」

ぶんぶん、とシャーリーが手を左右に振る。

「ちがうよ! そういうんじゃないなくて、あたし、学園の委員会に入ってるんだけど、そこが二人一組って決まりがあってね!」

「ああ……委員会か」

「結局、別の子と組んだからパートナーにならなかったんだけど。そんなとき、はっきりと断らなかつたせいか、勘違いされちゃったのかな? なんか、特別に親しいみたいに見えるの」

「誰であれ、仲がいいのは良いことだと思っけど」
 「うーん、仲違いする気はないけど……でも周りの人たちにまで、あいつと特別に仲がいいと思われているのって変じゃない？ 不思議！ 不思議！」

わざと周りから誤解されるように威昌沼が振る舞っているからだろう。

「あんな言い方をされたら、仕方ないと思うよ」

「はあ……迷惑って言ってるんだけどねえ」

「言ってるのか」

「何度もね。はっきりとね！」

「大変なんだなあ」

一度も異性からアプローチされたことがない柎貴には想像しかできないが、シャーリーの表情からは苦労していることが窺い知れた。

階段の踊り場で、くるりつとシャーリーが、こちらを向く。

「言っとくけど、柎貴は変な勘違いしないでよ？」

「今、説明されたから大丈夫だ。ぼくは、きみの言うことを信じるよ、当然」

「それならいいけど……あんなふうに、レベルで差別するような人と特別な仲だなんて、ありえない！」

十五階くらい上ると、だんだん呼吸が弾んでくる。

柎貴は眼鏡を持ちあげ、鼻をぬぐった。

「ふう……そういうや、レベルがどうこうって言ってたけど……なんだい？」

「気にしなくていいよ。たんなる数字だもん」

「実は、よく知らないんだ……レベルって、なにか重要なもの？」

意外そうな顔をされた。

「柎貴、レベルのこと、知らないの？」

「なんせ急に転校が決まったからね。渡された資料に目は通したものの、さっぱりで」

「じゃあ、特有幻想とか幻想具現化のことは？」

柎貴は愕然とする。まじまじとシャーリーを見つめてしまった。

「すごいね。やっぱり、子どもの頃とは違うんだな……」

「な、なに？ 急に」

「そんな難しそうな言葉が、きみの口からスラスラと出てくるなんて意外だよ」

「え？ にははっ、そうかな？ すごい？ すごい？」

シャーリーが嬉しそうに胸を張った。

「本当にすごいと思う。それで？ その特有幻想とか、幻想具現化っていうのは、どういうものなんだい？」

彼女が固まった。うぬぬ、と顔をしかめる。

うなりながら。

「うろうろ………なんていうか………えいやっ！ ドーン！ って感じ。にゃー」

「ありがとう、よくわかった」
「そう？」

「ああ、やっぱり、シャーリーだね！」
「にははっ」

「柎貴がわかつていることは——」

その才能のせいで、七年前にシャーリーがいなくなったこと。

そして、その才能のおかげで、今、シャーリーと再会できたこと。

「……ばくの能力は、本当にささやかだから、転校までして勉強しても何かの役に立つか疑問だけだ」

「覚醒したばかりだと、力が弱くてレベルが低いのが普通だから。これから変わると思うよ？」

「ああ、力の強さが、レベルなのか」

「おおざっぱに言うかね。テストの成績みたいなものって先生が言ってた」

「この学園では、それが重要なんだね？」

「クラス分けがレベル順だったりして、みんな、大事そうに言うけど……あたしは、どうでもいいと思うんだ」

「そうなのかい？」

「——だって、使える食堂は同じだもん！」

「なるほど、説得力あるね」

シャーリーはA組だと言っていた。

レベル順だとすると、一番高いクラスということか。

そして、威昌沼という男も、シャーリーと同じクラスらしい。あの態度からして、彼もレベルが高いのだろう。

「あんなもの気にしなくていいんだよ。レベルなんか数字だよ、数字」

「レベルは、どうやって決められるんだい？」

「うん……気にしなくていいって言っておいて、あたしがレベルについて話すのって、変じゃない？ だから、必要になったときに誰かに聞いて」

「もしかして詳しく知らないとか？」

「そそそんなことないよお」

シャーリーの視線が宙を泳いでいた。階段を上りながらだと危ない。

「まあ、職員室で説明されるだろうしね」

柎貴はため息をつく。

その鼻先に——ピシッと彼女が指を向けてきた。

真剣な表情をしている。

「ひとつだけ確かなことは！ あたしが、レベルなんかで相手を差別しないってこと！」

「……わかった」

うなずきを返すと、シャーリーが笑みをこぼした。高校生になって覚醒した柗貴は、まだレベルが低くて当然らしい。彼女は氣遣ってくれているのだろう。柗貴は感謝の言葉を呑みこんだ。それを口にする関係は、すでに対等ではないから。

まだまだ階段は続いている。

話題を変えることにした。

「そういえば……シャーリーが入っているのは、どんな委員会なんだ？」

「うちの委員会？　いろんな仕事があるんだけど……学園の規則に違反する人がいないか見回ったり、違反してる人がいたら注意したり、とか」

「風紀委員か」

「そんな感じかな。ちょっと大げさな名前がついてるんだけどね！」

「どんな？」

「規律委員会っていうの」

照れくさそうに彼女は言った。

たしかに、学園の委員会にしては大仰だ。なにかしらの意味があるのかもしれないが。「まあ、名前はともかく……シャーリーらしいって思うよ」

「あたしらしい？」

「きみは子どもの頃から曲がったことが嫌い、悪いやつがいたら自分より強そうな相手

でも、怯まずに向かっていく性格だったからね。正義の味方というか、無鉄砲というか。とにかく、よく無茶をしたもんだ。覚えてるか？」

「にははっ、そうだったねえ……うん、まあ、なかなか上手くないことも多いんだけどね」

「シャーリーは不器用だからな。誤解されることも多いんじゃないか？」

「ちよっとだけ」

苦笑する彼女の表情には、意外にも陰りがあった。昔は見せなかった表情だ。

なにか悩みがあるのかもしれない。

学園に来たばかりの柗貴には、あまり言えることがないけれど――

「シャーリー、きみ自身が正しいと思ってるなら、それが一番いいことだよ」「ん？　あはっ、そうかもね……ありがと、柗貴！」

彼女は暗い雰囲気を振り払うと、小学生だった頃の面影が重なるような、晴々とした笑みを浮かべた。

甲高い電子音があがる。

耳を突くような鋭い音が、広くはない階段に鳴り響いた。

シャーリーが左手を持ちあげる。

彼女の手首には、銀色の腕輪があった。薔薇のレリーフが彫られ、紫色の水晶が飾られ

ている。

右手で触れると音が止まり、同時になにもなかった空間に、半透明の板が現れた。これは幻の類ではなく、純然たる科学の産物である。

立体映像によるウィンドウに、赤色で《EMERGENCY》の文字。

「緊急……!？」

彼女の表情がこわばった。

「どうしたんだ？」

「校舎内でトラブルが起きて……どうしよう……委員会から出勤要請が来てる」

彼女はウィンドウと柗貴の間で、視線を往復させる。

だいたいこの事情を察することはできた。

「なにを悩んでるんだい？ ぼくのことなら気にしなくていい。子どもじゃないんだから、校舎内で迷子にはならないよ」

「う、うん」

「きみは呼ばれてるんだろう？ しかも、緊急事態だ」

「うん」

「なら、早く行かないと！」

あえて柗貴は強い口調で言った。

彼女の表情から迷いが消えて、真剣さのなかにも余裕が生まれる。

「ありがとう、柗貴。あたし、行ってくる！」

「そうしてくれ。ぼくは三十階の職員室に向かうよ」

今、二十五階だから、そう時間はかかるまい。

「案内、途中になっちゃって、ごめんね！」

「いいさ。また後で他のところも案内してくれると嬉しいよ。とくに美味しいケーキの店とか」

「うん、柗貴、ケーキ好きだもんね！ また後でね！」

シャーリーがうなずいて、駆けだした。

速い！

一瞬で階段を上ってしまうと、二十六階の廊下へと飛び出していく。

同時に腕輪を耳元に当てた。

「こちら、シャーリー、状況を教えて！」

仲間と連絡を取る声と、廊下を走る足音が、あつという間に遠のいて聞こえなくなった。



柗貴は一人になり、一抹の寂しさを覚える。しかし、もとより中途の転校生であり、心細いのは当然だろう。黙々と階段を上っていく。

二十八階に着いたときだった。

大声が響く。

「おい、見たか！ ハア……ハア……見たかよ！ あれが俺の力だ！ どうだ、まだ……まだ俺はできるだろう!! 使えるだろ!! だから……だから……もっと、アレを！」

切迫した金切り声だった。

ぼそぼそと、もう一人の声もしたが、なにを言ったのかまではわからない。

「……もう……やはり…………」

「んだと!? 話が違うだろうが!! 渡せ！ そいつを渡せ！」

どうやら、揉め事こじごのようだ。

怒鳴り声だった。

廊下のほうから聞こえてきている。

転校初日から面倒めんどろに関わりたくはない——けれども、トラブルが起きているかもしれないのの様子を見もしないのは、ちょっと情けないと思う。

暴力沙汰ぼうりょくたなら放っておけないし、問題なかったとしても、わずかな回り道でしかない。まだ時間には余裕があるはずだ。

柗貴は階段スベースから、廊下へと出てみる。

無音の廊下に、自分の足音が響いた。

静かなのは、今がH R 前の時間で、三十階より下が特別教室ばかりのフロアだからだろう。

ドアが開いたままの教室から、何者かが飛び出してきた。

針金のように瘦せた男子だ。

一人だけ。

——誰かと話していたように聞こえたけど、もう一人は教室の中か？ その男は荒い呼吸を繰り返していた。目は血走り、顔色は蒼白そうはくになっている。

「テ、テメエ……聞いたのか!? 今の話をして！ オイ！ なんて、そんなとこに、いやがるんだよ!？」

「いや……階段で上ってきたら、声が……」

「クソッ！ クソッ！ ああ……わかってる！ すぐに始末してやる！ だから、アレを！ いいな、約束だぞ!？」

教室の中に声をかけていた。やはり誰かいるのか。

男が柗貴のことを睨にらみつけてくる。

「クソがア！」

「……あの……なにかあったんですか？」
 ただならぬ雰囲気を察して、柢貴は離れたところから声をかけた。
 相手との距離は十歩ぶんほど。

「上で、一人……斬った」

「え？」

「そして、今から……テメエも……」

「な、なにを言ってる？」

「……すべて……斬る……斬れるんだ！ 俺は……なんでも……斬れる!!」

男が走って突っこんでくる。

「どういう……？」

「斬る！ 斬れる！ 俺は……うおおおっ！ 斬り裂け！ 《絶叫剣》!!」

ひきつったような男の叫び声と同時に、ヒュン！ と風が鳴った。

白い残光だけが円を描く。

範囲は一メートルばかりだろうか。

彼の周囲にある窓や壁やドアが、碎けて崩れ落ちる。

まるで最初から別の物体であったかのように、鋭利な断面を覗かせて、コンクリートの壁や金属のドアが床に転がった。

超常の現象。

「な、なんだよ、それ……!?!」

柢貴は背後へと飛び退いていた。

危ないところだった。

わざわざ間合いを詰めてくるからには、距離の限られた何かを仕掛けてくるのだろう、ナイフでも持っているのか？ と考えて遠くに離れたのだが――

まさか見えない刃物のようなものを振って、周囲を切断するなんて！ 扉や壁まで破壊するとは、予想外だった。

人間業ではない。

これが特有幻想ディアレイトというものに関係していることは、いくら知識のない柢貴でも察しがついた。

相手は狂気に満ちており、その行動は常軌を逸している。

「テメエ……なに避けてんだ、アアツ!!」

「こいつ、やばい！」

暢気のんきにしてたら、殺されるかもしれない。

理屈はわからないが、叫んだ瞬間に見えない刃物が振られる。その鋭利さといったら、鉄もコンクリートもおかまいなしだ。

針金のように細身の男が、明らかに加害者にもかかわらず、まるで被害者みたいな悲鳴をあげる。

「うわああああ!! 俺は! まだ使える! 役に立てる! こんなにも……こんなにも……強い! 強いんだ! うおおお!!」

「冗談じゃない!」

柗貴は逃げだした。

針金男が追いかけてくる。

廊下の行き止まりが見えてきた。

追い詰められる。

一番奥の壁に手を突き、急角度で曲がった。柗貴は教室のドアに手をかける。

開いた!

幸運にも鍵はかかっていなかった。

飛びこむ。

部屋はごく普通の教室だった。机と椅子がならんでいて、黒板の代わりに大型モニターがある。近代的な設備を持った一般的な教室だ。

窓の外には、二十八階の景色が見えていた。

逃げ場、なし。

「はあ……はあ……はあ……」

「ふうーっ、ふうっ、ふうっ……ふうーっ……」

柗貴よりもさらに呼吸を荒くして、針金男が教室の戸口に現れた。

理不尽な相手に、柗貴は言葉を投げつける。

「な、なんで、こんなことするんだ!？」

「ふうーっ……テメエが、俺たちの話を聞いたからだ!」

「聞こえたけど、意味はわからなかった……本当に」

「知るか! テメエを殺らなきゃ……お、俺がヤバイんだ! 俺は……見せてやるんだ。

まだ斬れる! まだ使えるってどこを!」

「……くっ……だめか」

話を通じない。

彼の言動から推測できるのは、誰かしら動機になっている人物がいるらしい、ということだけ。おそらく、あの教室にいたのだろう。

針金男は理性を失っていても、判断力は健在のようだった。ゆっくりと角へ追いこむように近づいてくる。

「斬る……斬る……斬る……俺は、斬れる……こいつも、同じだ……一人も、二人も……

同じ……」

「ううう……」

柗貴も特有幻想ディアルトを持っているが、戦いに使えるものではなかった。

——どうする?」

相手が間合いを詰めてきて、あの不可思議な力の範囲内に入って、叫ばれた瞬間、壁や

窓や机や椅子ごと柎貴も切断されてしまうだろう。
廊下から聞こえる足音はなく、助けが来ることはなさそうだ。
殺される？
身体が震えた。

ぼくは殺されるのか？

天井が崩落した。



轟音をたてて、頭上から照明パネルを兼ねた天井部材が落ちてくる。

迫ってきていた針金男が教室の外へ飛び退いたのが見えた。細身な外見に違わぬ敏捷さだった。

柎貴は身じろぎもできなかったが、教室の窓際にいたおかげで巻きこまれずに済んだ。幸運なのか。

不運なのか。

その後、上の階から落ちてきた奇妙な存在たちを目にすることになる。

トランプの兵隊と、帽子をかぶったネズミと、カモとインコとカニと子ガニと、巨大な猫と。

ふさふさの三角耳にしがみついた女の子。
透き通った声で、彼女は言う。

「……あなたは、だれ？」

柎貴は彼女の姿に見とれていた。金色の髪もサファイアの瞳も美しかった。

「ええっと、ぼくは、楠木柎貴……今日、転校してきたんだ」

「そう。ちょっと驚かせてしまったかしら」

「すごく驚いたよ。自分がおかしくなったかと思っただけくらいね——きみは、いったい？」

「……かわいそう」

質問の返事ではなく、憐憫が与えられた。

「ぼくが？ どうして？」

「……そこにいると、死んでしまうもの」

「えっ!？」

かすかな風切り音を耳にして、柎貴は振り返る。

窓の外には——

広げた翼が教室よりも大きい鷹の上半身と、ライオンの下半身をもつ生物が！

童話やファンタジーに登場する伝説の怪物。無気味な半獣半鳥の空想生物。その名は、グリフォン。

巨大な黒い影が、突っ込んでくる!!?

「うわあああああ!!」

柩貴は追われていたときでさえ発しなかった悲鳴をあげて、飛びこむように床に伏せた。窓ガラスが枠ごと碎ける音。

壁も割れた。

校舎が揺れる。

背中に、バラバラとガラス片（へん）が落ちてくる。

破片が人体に刺さるような古いガラスは使われていなかったが、大きな破片は、けっこの痛かった。

ガラス片の雨と校舎の揺れが止まる。

顔をあげると教室の天井から床までいっばいに巨大な鷹の頭があった。翼を広げた上半身と、ライオンの下半身は窓の外にある。大猫より、さらに大きい。

本当にグリフォンだ。

現実には、こんな生物はいやしなない。

空想の存在のはず。

トランプの兵隊や帽子をかぶったネズミたちと同じはずなのに。

野太くしゃがまれた声で、グリフォンがうめく。

「Oh! 挟（はさま）まった! しまった、壊（こわ）った、まったく困った、やっちゃまった! けれども、こんなビルなど溜（た）まった息（いき）で、吹いたらすぐに真っ平ら!」

ゴフウ、と息を吐こうとする幻想の巨大生物。

そいつを制したのは、大猫に乗っている女の子だった。

「……お待ちなさい」

「待った、と言ったか?」

女の子が追い払うように手を振る。

「もう相手がいないから……帰っていいです」

「Gurrrrrrrrr!」

獐（とら）猛な瞳をギラつかせ、グリフォンがうなった。

女の子と睨（にら）み合う。

てっきり、彼女は命令を聞かせられるのかと思っただが、予想外に幻想生物は反抗的だった。大丈夫なのだろうか。

柩貴は固唾（かたす）を呑んで見守る。

フンツ! とグリフォンが鼻息を荒げた。それだけで、トランプの兵隊が何枚か吹き飛ばされる。

「迫ったピンチが消えてしまったり？ 留^とまったって出番なし？」

「ええ」

「それならオレ様、まった今度！」

入ってきたときと同じくらい派手に、巨大な鷹の頭が、校舎の外へと出て行った。女の子が眉^{まゆ}をひそめる。

「……最後のは苦しかったですね」

グリフォンの、ま^まっ^た今^どに^だメ^め出^しだ^った。

「そういう問題なのかい？」

柩貴は身体のをえに落ちていたガラス片^{へん}をはたきながら、起きあがる。

壁には巨大な穴が開いており、今見たものが夢や幻でなかったことを示していた。

いや、この瞬間も夢の続きなのかもしれないけれども……

「……生きてよかったですね」

女の子がつぶやいた。

心のこもっていない口調だったが、内容には全面的に同意できる。

「本^{ほん}当^{とう}に^ね……もう命の危険がないなら教えて欲しいんだけど……きみは？」

「わたしのこと、知らないんですか？」

「ぼくは転校してきたばかりだから」

「そうですね……恐ろしくはないんですか？ この猫もトランプの兵隊たちも、さっきの

グリフォンも、わたしの特有^{デライナル}幻想^{げんそう}ですよ」

「びっくりしたし、グリフォンが突っこんできたときには恐^{こわ}かったよ。でも、いくら強くても力は力だ。使う人によって恐くも頼もしくもなる。きみは、ぼくのことを助けてくれたからね」

女の子が考えこむような仕草をした。

相変わらず無表情のまま。

「……天井を崩したとき、あなたのことは知りませんでした……助けられたのは、ささやかな偶然^{ごうぜん}です」

「あ、ああ、そうなのか。だとしても、グリフォンが来るって教えてくれたじゃないか」

「ええ、そうですね」

柩貴としては、それでも充分に感謝だった。ほんの少し前は絶望的な状況だったし。

女の子が小首をかしげる。

「……それだけで、信用を？」

「充分だよ」

「……信用のバーゲンセール中ですか？」

「いやいやいや！ ちゃんと考えて判断してるよ!？」

「閉店セール……」

「ぼく、閉店しちゃうの!？ 信用の安売りじゃないし、未永く営業予定だから！」

「そう思いたいだけでは……」

「な、なにか、信用されたくない理由でもあるのかい？」

いいえ、と小さく彼女は返事をした。

それから、ようやく質問に答えてくれる。

「……わたしたちは、規律委員会のチーム《お助け猫》です」

クールな印象の彼女の口から、意外と可愛いチーム名が告げられた。

それと、規律委員会と聞いて、シャーリーの言葉を思い出す。

規則に違反する人がいないか見回ったり、違反してる人がいたら注意したり、

「もしかして、さっき、ぼくを追いかけてきたやつが違反者なのか？」

「ええ……そろそろ、捕まるでしょう」

「え？ 逃げたんじゃ？」

「素早い相手なので……追いかめました。苦労しました……レベル4のはずなのに」

最後のほうは独り言のようにつぶやいて、彼女は窓の外へと視線を投げる。

柩貫も追いかけて目を向けた。

不意に、閃光が走る。

目が眩む。

校舎の別の場所から伸びた光が、学園都市のビル群の間を抜けて、地平線の彼方へと飛んでいった。

まるで、校舎から発せられた電光だ。あるいは、レーザー砲とか、そういう類の兵器だろうか。

ほぼ同時に地響きが伝わってきた。

「うわ、わわっ!」

柩貫は動揺したが、女の子には予想済みのことだったらしい。

「……………」

やがて、閃光と地響きが消えた。

女の子は金髪をかきあげて、左手を耳元へ近づける。彼女の手首にも、銀色の腕輪が填っていた。薔薇のレリーフと紫色の水晶が飾られている。

「——終わりましたか？ そろ……貴女としてはスマートです。では合流します」

柩貫は戸惑っていた。

自分を追いかけていた針金男は、この金髪の女の子から逃げていって、離れた場所でも何かがあり、他の誰かに捕まったらしい。

気がつけば、トランプの兵隊も帽子ネズミも消えていた。

残っているのは、瓦礫と壁の穴。廃墟のようになった教室。

それと、女の子だけ。

彼女は歪んだ戸口へと向かって歩いていく。

「ま、待って!」

「……苦情クレイムですか？」

「そうじゃなくて……組織とかチームの名前じゃなくて……きみは、誰なの？」
わずかに思案したあと。

薄い色の唇が開く。

「……アリス・クロックハートです。さようなら」

女の子は廊下へと姿を消した。

柩貴は立ちあがろうとする。しかし、全力疾走の疲労と、連続した驚愕きょうわくのせいか、膝に力が入らなかった。

浮遊学園都市《楽園カナン》。

ある種の才能に目覚めた者たちが集められるこの街を楠木柩貴が訪れて、最初に遭遇した事件だった。



幕間

intermission



外から風の吹いてくる教室で、柗貴は呆然と立ち尽くしていた。
廊下から、いくつもの足音が聞こえてくる。

濃緑のごついヘルメットをかぶり、制服のうえに防弾チョッキみたいなプロテクターを着た人たちが、たくさん教室に入ってきた。

先頭は髪を短く切りそろえた勇ましい雰囲気の子で、いかつい格好のせいもあって最初は男かと思っただけど、スカートを穿いている。

彼女は柗貴を見つけて目を丸くした。

「えっ、誰ッ!？」

「あ……ぼくは、転校生で……」

「そういうこと……環端末も渡してないなんて……」

「なに?」

「あとで先生から聞いて。今はケガの手当てが先でしょ」

「大丈夫だと思っただけど……」

「そんなわけないじゃない! 血が出てるもの!」

「あ、本当だ……」

ちよっとした擦り傷くらいだろうと思っていたが、膝のあたりに血が滲んでいた。ズボンが赤黒く染まっている。

気付いたら、ズキズキと痛くなってきた。

「そこに座って。すぐに治療できるから。他に痛いところは? 頭は打ってない?」

言われるがままに床にしゃがんだら、彼女も傍らにかがんで顔を寄せてきた。

眉が太くて意志の強そうな顔つきの少女だ。

柗貴は自分の身体を確かめる。

「えっと……あとは、肩を打ったかな? 頭は平気だよ」

「そう、肩ね。名前とクラスは?」

「楠木柗貴。二年だけど、クラスはまだ聞いてない。職員室に向かってたんだ」

「ついてないわね、初日からヘルキヤットに遭遇するなんて」

「ヘル……?」

「この教室をめちゃくちやにした人に、会ったでしょ」

「ああ、助けてもらった」

「そんなの偶然よ! 天井を落とすなんて、冗談じゃないわ! 壁も壊しちゃうし。いくら使つてない教室だからって、学校をこんなめちゃくちやに……許せない」

本当に悔しそうに彼女は唇を噛んだ。

「きみは……この学校が……好きなんだな」

「え？ うん、もちろん。だから、私はルールを破る人が嫌いだし、この学校を守るために規律委員会に入ったの」

「ああ、きみも規律委員会なのか」

「そうよ。支援隊のほうだけどね……あ、えっと、支援隊つてのは特有幻想が逮捕任務に向いてない人や、レベルの足りてない人が、後始末とか見回りなんかで前衛メンバーをバックアップしてるの」

「なるほど。そういう仕事も必要だよな」

「でしょ!？」

彼女は嬉しそうにうなずいた。

周りを見れば、状況を撮影したり、瓦礫を片付けたりしている。

全部で二十人くらいだろうか。

「私は……レベルが足りないんだけどね……。あつ、そのぶん、応急救護はしっかり勉強してるから、安心して！」

「わかった」

「まだ特有幻想なんでものに慣れていない柎貴としては、レベルのことよりも、この少女の真面目そうな言動のほうを頼れるものと感じた。

「そういうえば、名乗ってなかったわね——私は、二年Z E組の氷梨」

「氷梨さん、か」

「うん。じゃあ、楠木くんの手当てをするから……服を脱いで、傷を見せて」

「え……!？」

「なに？」

「こ、ここで脱ぐの？ きみは女の子だし……」

「馬鹿ね。怪我の治療で恥ずかしがってどうするの？」

「うーん」

仕方がないので、ベルトに手をかける。

ポツと氷梨が顔を赤くした。

「ちがッ！ 膝のほうは、ズボンをまくりあげるだけでいいの！ 脱いでって言ったのは、肩のほうで……シャツを……やだ！ もう！」

「そうか、す、すまない」

「う、ううん……わ、私の説明が足りなかったわね」
お互いに赤面してしまう。

柎貴はシャツのほうに手をかけた。



契約



傷は規律委員支援隊の氷梨に手当てしてもらった。

消毒して治療テープを貼っただけだが、もう痛みはないし、数日で痕も残らず消えるとのことだ。

運がよかった、と思う。

榎貴は予定を大幅に遅れて、三十階の職員室に辿り着いた。

もう一時間目が始まっているだろうか。

「失礼します」

ノックしてから、ドアを開けた。

先生たちの机がならんでいる大部屋を想像していたが、ぜんぜん違っていた。

小さな受付スペースがあり、壁にモニターがある。

コンピュータの『どちらさまでしょうか?』という音声に、榎貴は名前を告げた。

ややあって、奥から先生が出てくる。

灰色の髪の優しそうな男性だ。藍色のスーツのうえに白衣を羽織っており、丸眼鏡をかけている。おだやかな口調で話しかけてきた。

「ふむ、君が楠木榎貴くんか」

「はい」

「私は梁谷玄という——君のクラスの担任だ」

「よろしくお願いします」

「こちらこそ、お手柔らかに頼むよ。報告を聞いたが、どうやら、ずいぶん災難だったようだな」

「……驚きました」

控えめな表現をしておいた。

梁谷先生が苦笑する。

「いきなりヘルキヤットと遭遇するとは、いやあ、まったくついてない」

「ヘルキヤット……ですか?」

聞き間違いかと思った。

先生は笑顔のまま眉をひそめる。

「ああ……いや、彼女たちは規律委員のなかでも一番の実績を誇るんだが、なんせ被害も一番多くてな。ヘルプキヤットならぬ、ヘルキヤットだなんて渾名があるくらいで」

「なるほど、『お助け猫』じゃなく、『地獄の猫』ですか」

「はは……ヘルキヤットってのは『性悪女』ってスラングでもあるが……おっと、教師が初日から生徒の悪口を言っちゃ印象が悪いな。忘れてくれたまえ」

随分な言われようだった。

それだけ周囲に迷惑をかけているのかもしれない。

支援隊の水梨も、怒っていたようだ。

たしかに、殺人未遂の男が相手とはいえ、教室の天井を崩したり、壁に大穴を開けたりというのとは過剰だったかもしれない。

しかし、そのおかげで助けてもらった柗貴としては、複雑な心境だった。

「規律委員会というのは警察と協力して、この学園の治安維持を担っているんだが、まあ、ちょっとやり過ぎるメンバーもいてな」

「そうなんですね」

柗貴は曖昧にうなずいた。

「第十三校舎までは、すぐわかったかね？」

「カナンに友人がいるので、案内してもらいました」

「ほほう、それはいい」

柗貴はシャーリーのことを考える。

緊急事態と言っていたが、無事に解決できただろうか？

「楠木くん、友だちがいるのはとてもいいことだ。支え合ってこそ、人は高みに昇ることができる……といっても、君には必要ないかもしれないがな」

「え？」

梁谷先生が視線を手元に落とす。ウィンドウが開いて時刻を表示した。八時三十五分を告げる。

「授業中に入ることになってしまふな。まあ、歩きながら話そうか」

「あ、はい」

「伝えていなかったと思うが……君のクラスは、二年A組だ」

「え？ A組なんですか？」

「うちはレベル順でクラス分けするからな。君のレベルを考えたら、当然のことだよ」

「もしかして、A組がいくつもあるとか？」

「いや。どうしてだい？ 二年は三十番目のZE組まである。転校前に説明があったと思うが……君は現時点で学内最高評価の、レベル7幻想具現者だ」

「ぼかん、としてしまふ。」

柗貴は初耳だった。

いや、家に黒服の職員が来たときに、レベルについても説明されたのかもしれない。

けれども、急に知らない世界の話をして、その世界での評価を教えられたとしても、すぐに理解できるわけがない。柗貴が鈍いだけかもしれないが。

「……ぼくが、最高評価？」

「うむ」

「そんな。冗談ですよな？ だって、ぼくの持つてるのは、あれですよ……なにかの間違

いじゃありませんか？ さっきだって、すごいのを見ましたし……」
鉄扉を切断してしまう男や、グリフォンを呼ぶ女の子。

それに、校舎から飛んでいった光もあった。あれも誰かの特有幻想なのだろう。身震いするほどの超常現象だった。

柩貴の使える力は、ああいうのとは違う。

梁谷先生が真剣な顔をして。

「まだ詳しく知らないから、そう思うのかもしれないが……」

「本当なんですか？」

「あとで検査結果を見てみるかね？ 間違いでも冗談でもない。君は学園でも六人しかない、レベル7だ」

柩貴は言葉を失ってしまった。

梁谷先生がなにかを言いかけた、そのとき――

「……今の話、ほんと？」

そんな声が聞こえた。

忘れるはずもない、透き通るような綺麗な声だった。

廊下の先から。

柩貴は自分でも気付かないうちに早足になって、廊下の左側にある階段スペースを覗きこんだ。

階段の上に人影がある。

窓を背にして逆光になった景色のなかに。

あのときの、女の子――アリス・クロックハートがいた。

湖水のような瞳と、金を溶かした色の髪と、フリルのあしらわれた青色のドレス。

背丈の小さな彼女に、また見下ろされる形となった。

柩貴は空唾を呑む。

「……………きみは、いつも高いところにいるね」

「あなたと会ったことが、ありますか？」

「えっ、覚えてない？」

アリスは無表情のまま小さくうなずいた。

柩貴は肩を落とす。自分のほうは一生忘れられないと思うくらい強烈な体験だったのだが。

「まあ、ばくって特徴ないからな……天井を壊したときに下の教室にいたんだよ。きみはグリフォンが突っこんでくるのを教えてくれた」

「……あ……本部からの報告になかった人ですか」

梁谷先生が話に入ってくる。

「いやあ、すまなかったね。位置情報がモニターできてなかったんだ」
位置情報？ 柢貴は首をかしげる。

梁谷先生が銀色の腕輪を取り出した。シャーリーや、アリスがつけているのと同じような形の物だ。薔薇のレリーフは入っておらず、無骨な無地だったが。
「環端末といって、カナン生徒職員は全員がつけているんだ。学園外という携帯電話みたいなものだな。緊急時には規律委員会や教師に居場所を知らせてくれる。心拍数や脳波から健康状態までわかるんだ」

「なるほど。これがあれば、天井の下敷きにならずに済むわけですね」
「ははは……そういうことだ」

梁谷先生が苦笑した。

アリスは小首をかしげる。

「……それは、時と場合によるかしら？」

「いやいやいや、誰か居るとわかってて天井を落とすのはやめようよ！」

「……………」

不安になる沈黙だった。

アリスが先ほどの質問に戻る。

「……あなた、本当にレベル7なのですか？」

「今、そう聞いたところだよ。ぼくは評価されるような力は持っていないと思うけどね」

「……力の存在は……本人の自覚や希望とは関係ありません」

問いかけるような視線をアリスが向ける。

梁谷先生が請け合った。

「私は生徒の成績で冗談を言う教師ではない。楠木くんは間違いなくレベル7だ。しかし、その能力は、クロックハートくんたちが持っているようなタイプとは違っているので、評価が高いからといって実用的かというところ——」

「それは、わたしが判断します」

「え？」

声をあげたのは柢貴だった。

理解の追いつかない当事者を置き去りにして、アリスと梁谷先生の間で話が進んでいく。

「おいおい、楠木くんは学園に来たばかりなんだぞ？」

「……レベル7なら、授業など役に立ちません……空を飛べない人間に、飛び方を教わる鳥がいますか？」

「た、たしかに、得られるものは少ないかもしれないが、授業は能力の使い方だけを教えているわけではない。それぞれに大切な役割があるんだ」

「その大切な授業を……途中で邪魔することもないでしょう。もうすぐ休み時間ですし」
「むっ……………」

「それとも、わたしの特有幻想に棲む六六六の妖精たちに、なにか教えてくれるのかしら？」

素敵です」

「いや、はは……そいつは無理だな」

「残念です」

皮肉めいたアリスの言葉に、梁谷先生が黙りこむ。

階段の上から、彼女が見下ろしてくる。柢貴のほうへと視線を移して。

「……あなた、転校してきたばかりだそうですね」

「うん」

「わたしが学園を案内してあげます」

「えっ？　でも、今から教室に行くところなんだけど……」

梁谷先生が手を振った。白旗があつたら振っていたかもしれない。そんな顔をしていた。楠木くん、べつにかまわないぞ。クロックハートくんの言うとおり、今から行くと授業の途中になるわけだし。クラスでの挨拶は案内してもらった後にしよう」

「いいんですか？」

「まあ、なんというか………クロックハートくんの特有幻想《妖精進撃》は評価規格外でな。どういう意味だか、わかるか？」

「いえ……？」

急に専門用語を出されて、柢貴は首を左右に振った。

先生が声をひそめる。まるで、魔女の話をするかのように。

「……誰でもわかるように言うとな………暴れたら手につけられないから逆らうな」ということだ」

「ええっ!？」

「学園の平和のために、彼女の機嫌を損ねないようにな」

「学校なのに、そんなことでいいんですか？」

まるでガキ大将と取り巻きの子どもだ。社会とは、もっと法律と規則に守られているものではないだろうか。

「いいかね、楠木くん。学校というのは集団生活に慣れるための場所だ。大切なのは協調性なのだよ」

「みんなと仲良くってことですよね？」

「いいや。協調性というのは、みんなと同じように、強いヤツには逆らうな」ということだな」

「そんなっ!？」

「まだ君は若いんだから、長生きしたいだろう？　私は長生きしたい」

「そ、そりゃ、命は大切ですけど……」

ほんの少し話ただけだが、アリス・クロックハートが、それほど暴力的で非常識な子とは思えなかった。

しかし、先ほど教室ひとつ廢墟はきよにしていた。柢貴だって一歩間違えれば死んでいたか

もしれない。周りが怯えるのも理解できる。
ため息まじりにうなずいた。

「まあ、わかりました」

梁谷先生が銀色に光る環端末を渡してくる。

「これを付けておくように。それでは後ほど、二年A組で待っているからな。私は楠木くんの無事を祈っているぞ」

「祈……」

かえって不吉だ。戦地に赴く兵士に告げる「Good Luck」と同じに聞こえた。
逃げるように先生が職員室へ戻っていく。

アリスと二人きりになった。

「……もう、いいかしら」

階段のうえから、ゆっくりと彼女が降りてくる。

やっぱり背は低い。柗貴の胸元くらいまでしかなかった。

アリスは「下から見下ろす」という器用な目つきで、尋ねてくる。

「……あなた、名前は？」

「ぼくは楠木柗貴」

彼女に名乗るのは二回目だった。

「……そういえば、聞いたかもしれないわね」

「ぼくは、クロックハートさんって呼べばいいかな？」

「……ご自由に。楠木くん、わたしが学園を案内してあげましょう」

「ありがとう。よろしく頼む」

経緯はともかく面倒を見てくれるわけだから、感謝する気持ちに偽りはなかった。

アリスが相変わらぬ無表情でつぶやく。

「……変な人です」

「えっ!？」

なにか間違えたのだろうか？ と戸惑う柗貴だった。



エレベーターピラー前で少し待ち、乗りこむ。

下へと向かう。

スーツと音もなく身体が落ちていく浮遊感に包まれた。

「そういえば、クロックハートさんは、どうして、さっき階段にいたの？」

「……階段にいたら、おかしいですか？」

「いや。ぼくの知り合いにも、三十階まで階段を使いたがるようなのがいるから、おかし

くはないと思うけど」

「その人は、おかしいと思います」

「うっ、まあ、そうかもな」

アリスが視線を逸らす。

「……」

「……独りになれますから」

つぶやいた。

表情が変わらないので、いまい何を考えているのかわかりにくい。

「悩み事があるのかな？」

彼女に意外そうな顔をされる。

「……あなたには、悩み事がないんですか？ そんな人もいるんですね」

「あ、いや、そういうわけじゃないけど」

言われて考えてみると、柎貴には独りで思い悩むような問題は、今のところなかった。

戸惑うことばかりだけれど、自分ではどうにもならないことが大半だから、むしろ悩む余地がない。

「まあ、会ったばかりのぼくに相談できるようなことなら、独りで悩んだりしないか。聞こうとして悪かった」

「……………」

柎貴は今のうちに先生から渡された腕輪をつけておくことにした。開けて閉じるだけ。簡単だ。ウィンドウが現れ、『Welcome to Ring gear』と表示された。

のっぺりした銀色の一部に、空洞のくぼみがある。

「この穴は、なにに使うんだろう？」

「……いづれ、わかります」

「はは、みんな同じようなことを言うなあ」

「言葉では伝わりませんが。実感のない知識なんて、価値はないんです」

「そうかもしれないね」

軽い電子音が鳴る。エレベーターが一階に到着した。外に出る。

まだ授業中とあって、広い通路に誰もいない。無気味なくらいだった。

「……学園の案内でしたね」

「ああ」

「ここが、第十三校舎の玄関です」

「そうだね」

「そして、この先に喫茶店があります。ティータイムにしましょう」

「えっ!？」

いきなり外に出てしまった。

やっぱり、蒸し暑い。

アリスが左手を振ると、立体映像による半透明の白い日傘が現れた。彼女の頭上でいくらか陽光を遮る。

「わたしの祖国では、よく紅茶を飲みます」

まさか校舎内の案内が玄関だけとは思わなかった。ここは街全体が学園だから校舎の外でも学園の案内ではあるのだが……釈然としない。

しかし、どういった順番で案内するのか、なにかしら考えがあるのかもしれない。

「まかせるよ」

なにより、この学園都市の喫茶店というものに柎貴キタキは興味があった。駅を出てから何店か見かけていたが、入る機会はなかったから。

校舎を出て、マンシヨンのならば道路を歩くこと数分——アリスが行きつけにしている喫茶店は、街路樹に隠れるようにして建てていた。

英国のカフェを模した造りになっており、暗い緑色の壁と、茶色い屋根。玄関の横には、ユニオンジャックが掲げられている。

大きさは周りの家と変わらない程度だった。

木製のドアを開く。

カウンターでティーカップを磨いているマスターが微笑ほほえんで会釈した。アリスは目配せ

ただだけで、まるで自分の家のように奥の席へと向かう。

窓際ではなく、すこし暗い一番奥の席。

彼女のお気に入りなのだろうか。

「……そちらへ」

うながされた椅子いすに腰掛ける。その向かい側へ、アリスが腰をおろしていた。本物の木製の椅子なんて珍しい。テーブルも同じような造りだ。

「ふう……なんだか落ち着くね」

「そうですか？」

「使い慣れているのはプラスチックの机や椅子のほすだけど、やっぱり紅茶を飲むなら、木製のほうがいい。暖かみがあるよ」

柎貴の言葉に、わずかにアリスが表情を変えた。

ずっと遠くを見ているふうだった瞳が、ようやく目の前にいる自分を見てくれたような気がする。

「……この学園カクエンの最たる欠点です……学生相手だからと安っぽい店がほとんどで、ティーカップまでプラスチックのこともあるのです」

「それは、ちょっと味気ないかな」

「まったくです。ティーカップは陶器でなくてはいけません」

「うん、ほどよい重さというのがあるよね。プラスチックは軽すぎるし、たいいてい形が悪

い。カップの縁は薄いほうが美味しいと思うんだ」
はつきりとアリスがうなづく。

これほど明確に意思表示を見せるのは初めてかもしれない。

「分厚いオモチャのようなカップが出てくるとがっかりします。紅茶の専門店と称しておいてそれだと呆れてしまつて声も出ません」

「ポットにティーバッグがつつこんであるのもね。どんな理由があれ、情緒も味のうちだろう」

「ええ、しらけます」

「だよね」

柎貴が肩をすくめると、アリスは唇に指を当てた。

もしかしたら、笑つたのかもしれない。

「……意外です」

「なにが？」

「楠木くんは、紅茶にこだわりのある方だったんですね」

「ははは、顔に似合わないのは自覚してるけどね。喫茶店やレストランが好きなんだ。雰囲気がいいと落ち着くし、美味しいと嬉しいし、いろんな店を巡るのは楽しいよ」

「本当です」

「うん」

「……顔に似合いません」

「そつちかい。でも、こう見えても料理だつてするんだぞ」

「……なにが得意なんですか？」

「焼きプリンクレームプリンは自信がある」

「あら……なかなか本格的です。そういうご家庭なのかしら？」

「いや、そういうのは関係なくて——」
趣味を持った理由を探すのは、難しい。キツカケというのは、たいてい何気ない小さなことだからだ。

「——子どもの頃に、プリンを作ったんだ。粉をレシピ通りにお湯と混ぜてね。固すぎたし、甘くなりすぎたけど、友だちが、美味しいって食べてくれた。それ以来かな、他のレシピを試してみたり、あの店の味はどうだろう？ この店の味はどうだろう？ そのうち雰囲気や、食器まで気になりだして」

「……なるほど」

「食べることは生きることだと思う、つて言ったら大げさだけど」

柎貴は冗談めかして笑つた。

ゆつくりアリスが首を横に振る。

「大げさではありません……ティータイムは人生の彩りであり、人生そのものです」
「とすると、彩りのない人生は死んでいいるのと変わらないってことかな」

「あら……今度はポエムですか？」
 「え？ いや、文学はぜんぜんだよ。文字を読んでも頭が痛くなる。そんなに深くは考えてなくて、つまり、メシは美味しいほうがいい」
 アリスが無言になる。

「妙なことは口にしていないつもりなので、柎貴は首をひねった。」

「どうかした？」

「……楠木くんは、読めないですね」

「文字が？ 全くダメってわけじゃないけど？」

「空気が、でしょうか……」

「ははは、変なこと言うね、クロックハートさんは。空気なんて見えないものを読めるわけじゃないじゃないか」

「……なぜかしら。無性に腹立たしいです」

彼女の口がへの字になったあたりでタイミングよくティーセットが運ばれてきた。

注文もしていないのに運ばれてきたということは、いつもアリスは、これを頼んでいるのだからか。

品のいい緑色の模様が刻まれたソーサーと、ティーカップ。唇に触れる縁には金があしらわれている。

香りも上等だ。

自分に期待をこめて口をつける。その気持ちを裏切ることのない味わいが、深く胸に染みわたった。

「おお……これは……すごいな……」

「……気に入りましたか？」

「もちろん！ 味もすごいけど、器もいい」

「ウェッジウッドのティーカップです……趣味に合ったようですね」

「こんな綺麗きれいなものを使わせてもらうのは、ひさしぶりだよ」

「よかったら買っていくといいです。茶葉も器も」

「これも売ってるのかい？」

「値段が物の善し悪しあを決めるとは思いませんけれど……ペアで六万ジャパンドルJJDほどかしら」
 さらり、とすごい値段が飛び出してきた。

学園都市の相場は知らないが、日雇いバイトの平均報酬は一万JDくらいだ。
 あやうく手にしていたティーカップを落としそうになる。

「なっ、ぼくの当面の生活費より高い!？」

「生活費なんて大げさに言います……楠木くんが、今、飲んでる紅茶でも四千JDです」
 「えっ!？」

柎貴は硬直した。

聞くのではなかった。

たいへん美味しい紅茶だが、不純な気持ちが出てきてしまう。
泣きそうだ。

アリスが声のトーンを落とした。

「……まさか……本当に、そんなに持ち合わせが少ないんですか？」
黙ってうなづく。

彼女が無言でティーカップを傾けた。

ふう、と息をつく。

そして、初めて、はっきりとわかる嬉しそうな笑顔を浮かべて。

「うふふ……いつにも増して紅茶が美味しいです」



結局、支払いはアリスが出してくれた。

さすがに、自分のぶんくらいは出すつもりだったのだが。

「……今日は、転校祝いということにしてあげます。どうせ他に使い道ありませんから」
ケーキも出てきて、ちょうど一万円のお支払いだった。すごく美味しかったけど……
証費が料理を趣味とする、もうひとつの理由が、これだ。
美味しい食事は高価。自分で作れば材料費だけで済む。



はつきり言って、**柎貴**は貧乏だった。

喫茶店のあと——
 他のも出してあげるから、と言われてアリスに方々連れ回された。一度出してもらうと、その後が断りにくくなるものだ。

あっさりと昼休みまでが過ぎ去って、どんどん太陽が西に傾いていくのだった。

気がつけば、空の上にいる。

いや、もともと浮遊学園都市も空の上なのだが、この都市の娯楽施設のひとつに Gondola 型の浮遊機に乗って空を周遊するというアトラクションがある。《軌道観覧車》という名称がつけられていた。

「うわっ、う、浮いてる!?!」

「……カナンだって浮いてます」

「そ、そうだけども」

Gondola は全面ガラス張り、まるでソファーだけが空中に浮いているかのようだった。立体映像を使って、似たような体験をさせるアトラクションは学園外にもあったが、やはり本当に飛んでいると、気持ちの盛り上がり方が違う。

たいして揺れないので柎貴もアリスも立ってガラス窓から浮遊都市を眺めていた。

「……これがカナンです」

「おおっ!」

空中列車から見たときは上空から進入するせいで、雲海に浮かぶ島という感じに見えた。しかし、この Gondola は真横から眺めるため、まさに浮いている都市だとわかる。

傾いた陽光に照らされた浮遊学園都市——

巨大ビルの立ちならぶ街。

その土台は漏斗のような円錐状になっている。表面はブロックを組み合わせたような、四角形の積み重ねとなっていた。

街のあちこちに立体映像の広告や案内表示が連なる。

ゆるやかな曲線を描く白糸に見えるのは透明なガラスチューブで、その中を列車が走り、主要な施設の上層階を繋いでいた。

浮遊都市の周囲には淡く光る球体が衛星のように飛んでいる。これらは集光装置、監視装置、防衛装置などの機能を備えていた。

アリスが指さす。

「……カナン全体が大きいので、小さく見えるかもしれませんが、基部ブロックの一边は百メートル以上あります」

「そんなに!?!」

「……あれら、ひとつひとつに、カナンの環境を維持するための機能があって、故障時には内側に引きこんで都市地下にある工場で修理したり、交換したりできるようになってい

ます」

「へー、なるほどね!」

「これが、学校で教える常識……」

「え?」

「……環境維持装置のなかに、高性能な爆弾が紛れています。幻想具現者たちが反乱を起こしたときは、その爆弾がカナンを蒸発させる仕組みです」

「な、なんだって!? 本当に!」

「……どうでしょうか? 爆弾の存在を確かめた人はいません」

作り話、と断じることができると、柗貴は楽観的ではなかった。

背筋が冷たくなる。

アリスが抑揚のない声で言う。

「……楠木くんなら確かめられるかもしれませんが。なんせ、レベル7なのですから。管理者たちの手に余るほどの計測不能な力……それこそが、すなわち……」

「いや。ぼくは、そういうんじゃない」

「そうですね。藪をつついて蛇を出すこともないでしょう……レベル7であれば、カナンで贅沢な暮らしができますから」

「毎日、あの品のいい喫茶店でティータイムができるような?」

「はい」

柗貴は気が重たくなる。

「ぼくには、ちよっと向いてないかな。急に大きな力があるなんて言われても、なんだか自分のものって感じがしないし。そういうのと関係ないバイトをしようと思ってるんだ」

「……カナンから生活費は支給されますが?」

「いやあ、喫茶店とかレストランとかに行くと、けっこう取られるじゃないか」

「なるほど」

「それに部屋もね。支給された部屋を立体映像で見ただけど、厨房が狭いんだよ。小さな電子コンロがひとつだけ。あれじゃ、料理はできない」

「引越したいわけですか」

「最新のシステムキッチンなんて贅沢は言わないから、せめてコンロふたつと、まな板を使える場所と、旧型でいいからオーブンレンジが欲しいんだ」

——あと、冷蔵庫もそれなりのが必要か。

ベランダでハーブの栽培もしたい。

しかし、家賃が東京都心くらいするカナンじゃ、いくら取られるやら。1Rの物件でも月々十万JDだとか。

高校二年になっての転校だから授業についていけるかもわからないし、長時間のバイトは難しいだろうな——

ぶつぶつと柗貴は想いをこぼした。

横で見つめていたアリスが、ついつと左手を伸ばしてくる。ぎゅっ、と制服の右手の袖をつままれた。

「……変な人です」

「あ、ごめん。料理のこと考えると、つい」

「……レベル7の男性なんて、もつと暴力的で横柄で身勝手な人だと思ってました。自分を世界の王とでも勘違いしているような粗忽者かと」

「ぼくは自分の評価に実感がないし。たとえ実感したとしても、そんな勘違いはしないと
思うよ。レベルなんてテストの成績みたいなものなんだろう？」

「……どこの愚か者ですか……そのような世迷い言を教えたのは」

「違うのかい？」

「このカナンでは、レベルが全て……特有幻想が、その人間の価値に等しいのです」
シャーリーの言葉とは真逆だった。

力が人間の価値を決める。

そういう面が、この社会にあるのは事実かもしれないが。

「ま、待った。レベル7の人が、世界の王みたいに勘違いしてるのは嫌なんですよ？」

「ええ、大嫌いです」

「それなのに、特有幻想が全てっていうのは、おかしくないか？」

「なんの齟齬もありません」

「どういうこと？」

柩貴の袖をつまんだまま、アリスが冷たい目をして言い放つ。

「……この世界の王は、わたしですから。頂の見えぬ無知蒙昧な者どもは、強い力を全てレベル7として扱いますが、だからといって、わたしと並び立てると勘違いした道化などは疎ましく目障りです」

もしかしたら、この女の子が一番、歪んでいるのではなからうか——と柩貴は思った。

シャーリーが言っていたことが、ようやく理解できた気がする。レベルなんかで自分と周りに上下をつけるなんて馬鹿馬鹿しい。

ため息がこぼれた。

「きみは、どこか放っておけないところがあるな。とても賢いのに、すごく性格が曲がってる」

「……なんですって？」

それまで、柩貴の右手の袖をつまんでいた彼女の左手が、離れる。

目の前からいなくなってしまうような気がした。彼女の超常の力をもってしても、消えるなんてことができるのかはわからないが。

「聞いてほしい」

柩貴は右手でもって、離れていく彼女の左手を、つかんでいた。痛くしないように。強くは握ってないつもりだが。

「やッ!？」

アリスが、ビクッと肩を震わせた。

そして、睨まれる。

「……死にたいのですか？」

「きみのことを、放っておけない」と思ったときから、それくらいに脅しは覚悟してるよ。とにかく、話を聞いて欲しい。きみは性格が曲がってるが、判断できる賢さも持つてるはずだ」

「……話してみるといいです」

ぐいぐいと左手を引っこめようとしていたが、離れた瞬間になくなってしまいそうに思えて、柩貴は緩めなかった。

「きみの能力はすごいと思う。命を助けてくれたことには感謝もしている。でも、きみのことを王だとは思わない。ぼくがレベル7だからじゃないよ。その評価はなにかの間違いだろうからね」

「……意味がわかりません。わたしを上だと認めない。自分が上だとも思わない？」

「ああ、上も下もない」

「……あなたは、この学園でのレベルの価値を理解してないから、そういうことを言うのです」

「ぼくは、レベルで差別しない。この後、なにを知ろうとも。きみのように独りきりになりたくないからね」

「……ッ!？」

アリスが狼狽した表情を見せる。

視線が窓の外へ。

「……な、なにを言っているのですか？ わたしには大勢の仲間がいます」

「怖がらせて従わせてる相手は仲間とは言わないよ？」

「ううう……」

ようやく、彼女の心が見えた、と感じる。

悔しそうに歯嚙みする様子は年相応か、むしろ幼く見えた。

目尻に涙すら浮かべて睨んできた。

「……生意気です……わたしに意見するなんて」

「ぼくも特有幻想を使って従わせるかい？ きみは大きなものを二つ失うことになるぞ」

「ふんっ……ゴンドラを壊したら一蓮托生だと思ってるのですか？ 愚劣です。わたしの六六六の妖精のなかには飛行能力を持つものが、九八もいるのです」

なるほど、彼女が能力を発動してゴンドラを吹き飛ばした場合、柩貴は高度千メートル

を落下。彼女は妖精とやらに乗って帰還できるというわけだ。

恐ろしい話だが、それくらいは予想の内だった。

柢貫は首を横に振る。

「そうじゃない。きみが失うのは……ぼくという友人だ」

「……え？」

ぼかん、とされた。

そういう反応を期待して言った言葉ではあるが。

「友人だよ。きみがどんな大きな力を持っていようと、この世界の王だとか妙なことを言い出そうと、ぼくたちは一緒にお茶した仲だ。その記憶は消えない。少なくとも、ぼくは、きみを友人だと思ってる。きみがどう感じてるかは知らないけどね」

アリスは冷やかな表情をしていた。

声まで氷のよう。

「……楠木柢貫は無礼者です……おごってあげるんじゃないよなかつたです」

「今それを持ち出す!? ま、まあ、いつか、お返しする……よ？」

「……それで？ あなたという無礼者の自称友人の他に、もうひとつ失うものとはなんですか？」

自称友人とは、事実だが嫌な響きだった。

気を取り直して柢貫は余裕を見せる。これには自信があった。

「ふっふっふっ……ぼくの作るクレームブリュレだよ。食べないと絶対に後悔する」

「……………」

胡散臭うさんくさそうな目で見られた。

けっこうシヨックだ。

「あーいや、本当に美味しいから。本当、本当」

「……焼きプリンで、命乞いですか」

「ええっ!? いつの間に、命乞いになったんだい!? もしかして、今、処刑寸前なの？」

「当然です」

アリスが視線を投げかける。

窓の外に《軌道観覧車》の乗り降り場が見えてきた。あと少しで、このアトラクションは終わりとなる。

二人して近づいてくるゲートを眺めていた。アリスが思案している様子だったので柢貫は待ち続ける。

ようやく、彼女は口を開いた。

「……柢貫くんが……わたしを友人だと思うのなら……………」

急に下の名前と呼ばれて、ドキツとした。

最初に会ったときにも、見とれるほど綺麗だと思った女の子だ。こんなに間近で、先程までの冷たい表情ではなく、どこか熱を帯びた視線を向けられたら、頬が熱くなっても仕

方ない。

しかも、勢いとはいえ、柗貴のほうから、彼女の手を掴んでしまっている。

「お、思うなら……?」

彼女は思案して、ため息をついた。

「……………なんでもないです。わたしを変な目で見ないでください。気持ち悪いです」
「えっ!? ベつに変な目で見てないって」

「……………いつまで手を握っているんですか?」

「あ、ごめん」

柗貴はあわてて、彼女の左手を放した。

すっかり馴染んでいた感触に、未練がないわけではなかったが。

アリスは自由になった手を見つめる。

相変わらず、感情の読めない顔で。

「……………わたしに告白をした分をわきまえぬ愚か者たちには、例外なく《妖精進撃》を發動させてきた、と警告しておきます」

「せめて、普通に断ろうよ」

「……………だから……………手を握った人なんて、初めてです」

ぼそぼそ、と彼女が珍しく聞き取れないほど小さな声でつぶやいた。

「え? なに?」

「……………こちらのことです……………あなたは、変な人です。わたしのことを友人だと言ったのは、柗貴くんで三人目です」

「えっ、そうなのかい?」

「意外そうですね」

「うん。ぼくが初めてかと思った」

「……………二人目も同じことを言いました。失礼です。万死に値します」

「ははは」

あまり表情が変わらない彼女の心の動きが、ようやく掴めるようになってきた。

相手も緊張が解けてきたせいか。

「……………柗貴くんは、バイトを探しているそうですね?」

不意に話が変わった。

もしかしたら、彼女のなかでは繋がっているのかもしれないが。

柗貴はうなずく。

「まず授業についていくのが先だけだね。大丈夫そうなら」

「……………世俗にまみれた話は、あまり趣味ではないのですけれども……………わたしは、とてもいい仕事を知っています……………授業に差し障りなく、内申評価は高くなり、破格の報酬が得られるでしょう」

願ってもない話だった。探している条件に、すごく近い。

「それ、なにか必要な資格とかあるんじゃないのか？」

「わたしの紹介が必要です」

「なるほど」

「……空席は一名のみ」

「ッ!？」

そう聞くと、判断力が鈍るものだ。

報酬が高いならば大変な労働であろうと思うが、それくらいはかまわない。

さらに、アリスの言葉が背中を押す。

「……気に入らなければ、その日のうちに辞めることもできます」

「受けておいて、すぐに放り出す気はないけど……まさか、なにか不正なことをするんじゃないだろうね？」

「不正は行いません。むしろ、大勢に感謝されるお仕事ですから」

「それはいいな。ぜひ紹介してもらえないか？」

アリスがうなずいた。

「……左手を」

差し出されたアリスの左手に、合わせるように柎貴は左手を伸ばした。

そっと手が触れられる。

やわらかい。

ひんやりとした冷たい手の感触。

そのまま、進まない。

彼女は躊躇するような迷っているような様子だった。視線は遠くを見つめている。

「んう……」

「なにか、問題があったかい？」

「問題なんて、ありません。ありえません。平気です。絶対に」

「そうかい？」

「……これは……お仕事をするための、契約です。ささやかな決まり事です。わたしの言葉を真似て、言ってください」

「わかった」

アリスが流暢りゅうちように異国の言葉をそらんじる。

「*From now on, a contract will be begun. Signed a contract with you. We will share the results...*」

彼女の母国の言葉だった。

柎貴は拙つたないながらも、音を追いかけていく。

ゴンドラの中で風が巻いた。

彼女の金色の髪が、ふわりと浮き上がる。スカートまでが持ち上がってきた。目の前に立つ柎貴の足に、ばさばさと当たる。

二人の左手を中心に、まばゆい輝きが広がった。
立体映像なのか。

そうは思えないほど神秘的な輝き。

光の円が幾重にも現れ、大きく広がっていく。環わの線と線の間には、異国の文字が浮かびあがった。

ゴンドラの外にまで広がっていく。

環リング端末は純然たる科学の産物のはずなのに——これは、まるで魔法陣だ。

「*We share responsibility. We swear, and that help each other, each believing that...*」

アリスの言葉を証責はなぞる。

魔法陣が、ひととき輝きを増した。

「*We are "Step out"...*」

キイイン……と耳の奥に刺さるような高い音があがる。

やがて、光も音もなくなった。

アリスが左腕の環リング端末に視線を落とす。

「……青ですね」

彼女の腕輪バンドルに填はまっている水晶が、綺麗な青色になっていた。

「それ、朝は紫色じゃなかった？」

「ええ……よく覚えていますね……今、契約したから、変わりました」



「契約？」

柩貴は自分の環輪末を確かめる。

無骨な銀色の腕輪のくぼみに、アリスのと同じ青色の水晶が填っていた。

「これって、なんだい？」

「……規律委員会のパートナー契約の証です」

「えっ!? もしかして、さっき言ってた仕事って……」

「……緊急招集では授業が免除され、希望すれば補講を受けることができ、内申では高く評価され、所属するだけでも高額の報酬が支払われます。特有幻想を悪用する違反者がいないか見回り、発見すれば逮捕するのが仕事ですから、大勢に感謝されます……柩貴くんの希望どおりです」

「ちよっ!? 待ってよ、クロックハートさん。ぼくは特有幻想を使わない仕事がいいって言ったんだけど!」

アリスが黒い笑みを浮かべた。

「……使わなくてもかまいません。必要なのは、規則違反者を逮捕することであって、どういう手段を取るかは自由ですから」

「あ、ぐっ」

してやったり、という笑みも、すこしの間だけだった。

すぐに表情が失われる。

「……気に入らなければ、この場で破棄もできます……パートナー解消」と宣言するだけです」

なんでもないことのように言うが、ここで拒絶したら、彼女は傷つくように思えた。柩貴は少し考えてから。

「どういうつもりで誘ってくれたのかは、わからないけど……クロックハートさんの言うとおり。規律委員会の仕事は、ぼくの希望に近いみたいだ。ぼくの特有幻想は役に立たないと思うけど、やれるだけやってみるよ」

「そう……そうですか……パートナーにしたからには仕事を教えます。でも明日から」

「ん? 今日は?」

「……疲れたので帰ります。シャワーを浴びたいので……」

彼女の張り詰めていた雰囲気が消えていた。
安堵したのだろうか。

それだけではない感じがする。

疲れている?

むしろ、落ちこんでいるのか?

表情に出さない子だから、わかりにくい。

天井のスピーカーから、到着を予告するアナウンスが流れてきた。《軌道観覧車》のゴンドラが、チューブ状の乗り降り場へと入っていく。

ゆっくりと停止した。
すぐにドアが開く。

次も来るから、そうぐずぐずしてはられない。

元気のいい案内役の女性にうながされ、柗貴とアリスはゴンドラを降りた。

アリスが娯楽施設の外へと向かう。背中を向けたまま。

「……これで、さようなら、ですね」

「え？」

もう帰るといふ意味かと思っただが、そうではなかった。

彼女は静かな声で言う。

「……二人目の友人の話です。あちらから離れていってしまい……さっき、わたしが別のパートナーと契約しましたから」

「別の？ それって、ぼくのこと？」

「はい」

なにか、重大なことに巻きこまれた気がする。

柗貴が契約したことで、彼女と友達の関係が終わってしまったということか。

それは聞き捨てならない。

「離れていったって、どういうことだい？」

「……わたしは、悪くありません」

「いや、きみが悪いとは言っていないけど」

性格に難があるのは、よくわかったけれども、事情を聞かずに決めつけるのはよくない。

「……今朝の事件で、被害が拡大したのは、わたしが悪いと言うものだから」

「そんな！ あれで悪いのは、ぼくを襲った男だろ!!？」

「……腹立たしいので、ちょっと規律委員会本部で特有幻想を具現化させたら、本気で怒り出して」

「そ、それは……」

「あちらから離れていったので……わたしは悪くありません」

もうすこし具体的な経緯がわからないと判断できないが、今の話を聞いたかぎりだと、だいぶ彼女にも問題がありそうだ。

「もうすこし詳しく教えてくれないか？」

「……お断りです。思い出すのも忌々しいです」

とりつく島もない、という感じだった。

人当たりがいいとはお世辞にも言えない。

こんな性格の少女と友達になる人物に——柗貴は一人だけ心当たりがあった。確かめておかなければならない。

「じゃあ、その二人目の友人の名前を教えてくださいませんか？」

「どうしてです?」

「ダメならいい」

すこし考えてから、アリスは振り向かないまま、名前を口にした。

「……桜坂シャーリーです」



幕間 *intermission*



薄暗い小さな部屋だった。

照明は天井が、ぼんやりと光っているだけ。窓はない。

机も椅子もなく、中央にベッドがあった。

そこにベルトで拘束された男が一人。手足も胴体も細くて針金のような男が、寝かされていた。手首には手枷のような分厚い金属の板が填められている。

部屋に一条の光が差しこむ。

ドアが開いて、白衣を羽織った男が入ってきた。

「やあ……」

「ふうー……ふうー……ふうー……」

「元気かね？ いや、元気には見えないが……生きているだけでも君は幸運だな。いや、不運だろうか」

針金男は首だけを起こして、血走った目を向ける。

来訪者は、ぶつぶつと独り言のようにしゃべっていた。

「ああ、安心したまえ。監視カメラも録音装置も切っている」

来訪者の口元が歪んだ。

針金男はなにか言おうとして口を開いたが、荒い呼吸と言葉にならぬ声だけが漏れた。

「ふうー……うあ……あああ……」

「しゃべれないのか？」

「うあ……」

来訪者が近づいていくと、針金男が怯えたような表情を見せた。もう、叫びながら柵貴を追い回していたときの面影はない。

「調整の結果は良好のようだな」

「ううう……」

「私のことを覚えていないかね？ まあ、それも効果のうちだから当然だが」
拘束された針金男の横に立った。

「あ……ぐ……」

来訪者が針金男の耳元に唇を寄せ――

「それでも!! レベル7には遠く及ばなかった!!」

叫んだ。

耳元で怒鳴られた針金男が表情を歪める。

「うぎっ!？」

「また失敗か……悲しい事実だな。絶望にうちひしがれ、心が折れそうになる」

「うろう……」

「しかし、君の献身を無駄にはしない。私には大いなる目的があるのだ。君の尊い犠牲が、学園の未来を救うまで、諦めはしないと約束しよう。研究は最終段階を迎えつつある」
来訪者は白衣のポケットから太い注射器を取り出した。針金男の手に押し当てる。

小さな駆動音。

針が自動的に血管を探し出し、痛みどころか感触すら与えずシリンダーと連結させ、事前のプログラムどおりに作動する。

やがて、注射器を外して、来訪者はベッドを離れた。

「ゆっくり休みたまえ……おやすみ、子羊よ」



アリスの部屋



榎貴は一人で第十三校舎に戻った。

環端末のナビゲーシヨンのおかげで短時間で戻れたものの、もう本日最後の授業の時間になっている。

すっかり遅くなってしまった、と足早に教室へ向かう。

ようやく二年A組に辿り着いた。

本来は朝の八時には、ここで挨拶をしているはずだったのに、もう何時間も過ぎている。長かった。

榎貴は今朝からのことを思い出し、ため息をついた。

早朝、駅までシャーリーに迎えに来てもらい、校舎を訪れた。エレベーター前で威昌沼という男に絡まれて、仕方なく階段を上ることに。

途中で、緊急事態の知らせがあつて、シャーリーと別れた。

その後が問題だった。榎貴は針金男に襲われてしまう。あれはヤバかった。

追い詰められたところで、アリスの特有幻想たちが降ってきて、逮捕劇に巻きこまれた形だが、結果として助けられた。

規律委員支援隊の氷梨に手当てしてもらって、先生に挨拶し、教室へ向かったが……

再会したアリスによって、校舎の外へと連れ出されてしまった。もう予定もなにもあつたもんじやない。

思い返してみても、おかしい。教室から離れる。

しかし、素晴らしい紅茶を味わえたのは幸運だった。あれはとても美味しかった。

それはともかく、まさか教室で挨拶をする前に委員会に入ることになるとは！ 環端末で確かめたら、まだ《予備登録》という状態だった。

アリスは早引きして帰ってしまった。そのような経緯で、榎貴はようやく教室へと辿り着いた、と――

榎貴はドアの前で深呼吸した。

中の声は、廊下に聞こえてこない。ずいぶん静かだ。

きっと授業中なのだろう、とドアをノックして、ゆっくり開いた。

誰もいない。

「あれ？」

教室にある大型モニターには「体育…12B体育館」と表示が出ていた。

「ぐっ……なんだか、運の悪い日だなあ……ぼくは転入の挨拶をしたいだけなのに……」

体操着など持ってきていないので、着替えることもなく体育館へと向かう。六十階もある校舎だが、環端末のおかげで迷うことはなかった。

第十三校舎、十二階層、12B体育館――

大きな鉄扉を押し開いた。

甲高い掛け声と、バスケットボールが床を叩くリズムカルな音が聞こえる。
ダムダムダム……

「てやああああああ!!」

オレンジ色のボールを片手で支えて、タンツと跳んだのは、体操服姿のシャーリーだった。頭の後ろでふたつに結った明るい色の髪が、残光のように尾を引く。

まるで周りがスローモーションであるかのように、一人だけ別次元の速さと高さで、手にしたバスケットボールをリングに叩きこんだ。

いわゆる、スラムダンク。

「おお……」

柎貴は驚きと同時に、懐かしさを覚える。

七年前にも同じような姿を見ていた。あのときは、彼女の髪は短くて、リングは子ども用の高さだったけれども。

よく一対一で勝負したものだ。

「ん？」

ゴールを決めたシャーリーがコートの中かから走ってくる。

「柎貴〜〜!!」

「えっ……待った……それは、ちょっと……」

スプリント競技かと思うような速さでつつこんできて、アメフトばりのタックルが来た。後ろは鉄の扉なので、さすがに避けるわけにもいかずに受け止める。

予想外に軽くてやわらかい感触だった。

「柎貴!」

「や、やあ……」

「もお、どこ行ってたの!? 先生に聞いても知らない」としか言わないし。あれから、なにかあったの!？」

返事をする前に、抱きついてきた彼女を押し返す。

体操服姿だと、制服以上に密着感があって、とんでもなかった。

「シャーリー……もう高校生なんだから、よくよく考えてくれ……」

「あ、ごめんね」

「周りの目ってものが……」

女子たちが、「あれ誰なの!」「まさかカレシ!」と色めき立っている。男子たちは驚いてる様子だった。初日の挨拶前からとても気まずい。

シャーリーが体を離して、ペロリと舌を出す。

「にははっ、そうだね！ 汗かいてるもんね」

「いや、違う。そういうことじゃない」

「あれ？」

女子高生にもなったというのに、この七年でデリカシーのほうは成長しなかったらしい。シャーリーがコートを指さす。

「柗貴、ひさしぶりに勝負しようよ！ すっごい楽しみにしてたの。再会できたら、やりたいと思ってるのが、いっぱいあるんだよ!？」

「ああ、ばくも楽しみなんだけど……」

つかつか、と女の子が近づいてくる。周りは白シャツに短パンなのに、なぜか一人だけ赤色のジャージを着ていた。幅広のヘアバンドで髪を後ろに流し、おでこが出ている。背丈からしても、顔つきからしても子どもに見えた。

——小学生だろうか？

しかし、ここは高校のはず。飛び級か？ あるいは、幼い容姿だけで高校生かもしれない。

「こら！ 桜坂、試合中だぞ！」

「あ、すみません」

「そして、お前ッ!!」

小学生にしか見えないけど、妙に偉そうな女の子が指さしたのは、柗貴だった。

「どこのクラスの者だ!？」

「ぼくは、今日、転校してきた——」

「ああ、楠木柗貴か！ 転校早々、アタシの授業に遅れてくるとは、いい度胸だ！」

「ええっ!? まさか……先生なんですか!？」

「……ほほう？ どうして、そんなに意外そうな顔をする？」

女の子——ではなく、どうやら、体育教師の目つきが剣呑なものになった。

しかし、根が正直な柗貴は、つい余計なことを口走ってしまう。

「てっきり小学生かと」

「よし、わかった。まずクラスの連中に転入の挨拶をしろ。それからスクワット百回だ！」

「そんな……」

とはいえ、遅刻したのは事実だから百回くらいなら、と諦める。

三十人ほどのクラスメイトたちが集合した。

こんな形で挨拶するとは予想外だ。

「楠木柗貴です。よろしくお願います……えっと、シャ……桜坂さんとは、幼馴染みです」

女子から「それだけの関係なんですか!？」なんて突っこみを受けたが……小さい先生が大きな声をあげ、質問タイムを容赦なく打ち切る。

「よし、授業再開！ おら、次のチームはコートに入れ！ 楠木、体操服はどうした？」

「体育があると知らなかったので……」

「聞いてなかったのか？」

「はい」

「チッ、アタシの授業があることを伝えてないとか、ナメやがって。あとで梁谷はりやのヤツ、シメちやる！　そこで見学してろ！」

「あ、はい」

どうやら、スクワット百回はなしになったようだ。言葉遣いは厳しいけれど、もしかしたら優しい先生なのかもしれない。梁谷先生には同情を禁じ得ないが……

言われたとおり、体育館の隅で見学する。

試合に出てない女子たちが興味津々という顔で寄ってきた。

「ねえ、楠木くん」

「ん？」

「本当に桜坂さんと、なんともない関係？」

「……まあ、ぼくも驚いたけど……中身が子どもだけじゃないかな？」

女の子たちが、ひそひそ声で話す。

「たしかにちよっと子どもっぽいところあるかも？」「マズイって聞こえちゃうよ」「でも、いくら幼馴染みでも、アレはないんじゃない？」「そうだよ、怪しいよね〜？」

キヤアキヤアとやってるところに、強面こわもてな連中が来た。

男子生徒が三名ほど。

「よお、転校生」

「きみたちは……？」

「ちよっと話があるから来いよ。女子とは話せて、俺らとは話せないとか言わないよな」威圧感のある彼らに、周りにいた女の子たちが距離を置く。

嫌な雰囲気だ。

「行くのはいいけど……さすがに、遅れてきて無断でいなくなるってのは……」

「気にすんなよ、もう終わるだろ」

言ってるうちに終業のチャイムが鳴った。

先生の「はい、終了お!!」という声が聞こえてくる。

断る理由はなくなったようだ。シャーリーに話があったのだが……後にしてくれ、と言って通じる手合いではないだろう。

仕方なく、柎貴は彼らに付いていくことにした。



こんなときは、校舎裏というのが定番だろうが、この校舎は六十階建てだ。ぞろぞろとエレベーターに乗るのは間が抜けている。

結局、連れてこられたのは、十二階から少し上った階段の踊り場だった。

賑わっているエレベーター前と違って、こちらは閑散としている。どこにでも人目の届かない場所というのはあるものだ。

階段の途中で待っていたのは、威昌沼だった。
 儼然とした顔で見下ろしてくる。

「お前がA組とはな……」

「ぼくも、何かの間違いじゃないかと思うんだけどね」

周りを男子四人に囲まれる形となった。

威昌沼が左腕を上げる。蛇のレリーフの入った腕輪をしていた。水晶は填っていない。ウインドウが表示された。

なんでもないジャンケンゲームを立ち上げ、数回、勝ったり負けたりする。

どういう意味があるのか？

やがて、ザ——っとノイズのような音が静かに流れ出す。

威昌沼が獣のような笑みを浮かべた。

「くく……これで、録画も録音も効かねえからよ」

「どういうことだい？」

「環端末には、生徒の動向を記録する機能があるんだ。もう無効にしたけどな」

「それって……もしかして規則違反だったりしないのかな？」

「黙れよ。下らない規則のことより自分の心配してる」

「なにを心配すればいいんだか……」

「余裕ぶりやがって。この場で俺らにボコられるか、これから俺らの言うこと聞くか。選べよ」

「どちらも嬉しくないかな」

柎貴を取り囲んでいる男たちが、拳を握る。

「おい、転校生。言葉だけの脅しじゃねえぞ？ 俺の言うことを素直に聞いとけ。今なら、

腹に一発で済ませてやるからよ」

「断る」

「おい、お前、状況がわかってんのか？ 通報もブロックしてんだ。助けなんか来ねえぞ!? 今なら一発だけで済ませてやるって言ってるんだよ！」

威昌沼が恫喝の声をあげた。

柎貴はため息をつく。

「そういう脅しは、一度、屈したら、どこまでも酷いことを要求される。しかも、その様子だと、ぼくが初めてというわけでもなさそうだ……ここは、引けないね」

「そうかよ。んじゃ、明日から学校じゃなく、病院に通いやがれ!!」

威昌沼が叫ぶ。

背後にいた男が両手を伸ばしてきて、柎貴は羽交い締めにされた。

「むっ……ケンカも一人でやれないのか？」

「ハッ！ こいつは制裁だ。桜坂に馴れ馴れしくした罰だ！」
威昌沼が拳を伸ばしてくる。

どう考えても、一方的に殴られてやる理由はなかった。上半身を羽交い締めにもされていても、足の自由は奪われていない。なんとも中途半端なことだ。腕より足のほうが長いというのに。

向かってきた威昌沼に、右足の蹴りを放った。腰の入った蹴りでなくとも、膝を突き出してから、膝下をスイングすることで威力のある蹴りになる。

相手の脇腹に、爪先が届いた。めりこむ。

「ガッ!」

威昌沼がもんどりうって崩れた。

戻す右足のカカトで、羽交い締めをしている男の爪先を踏みつけた。足の甲だと、さして痛くないが、足の指は人体の弱点のひとつだ。

背後から、「ギャッ!」と悲鳴があがる。

相手の力が緩んだ瞬間に、上体を大きく振って、羽交い締めから逃れた。

今さらになって、左右の男たちが拳を構える。べつに恨みはないが、やるというのなら躊躇わない。

右の男の鼻にパンチを浴びせ、反転して、左の男の膝裏にローキックを当てた。

うめき声をあげ、ひるむ。

彼らは後ずさりして距離を取った。

柎貴は右手に残った感触を払うように、手首を振る。

「もう少しケンカ慣れしてるのかと思っただけど」

「な、なん……ッ!? なんだ、お前は!」

「ぼくはケンカなんて嫌いなんだけど、シャーリーと一緒にいると荒事が多いんだよ。彼女は、横暴なヤツがいると相手の強さに関係なく突っこんでいくからさ……。あと、なぜか目の敵にされることが多くてね」

おかげで、こうした事態への対処方法が自然と身についていた。

そして、シャーリーがいなくなつたあとも修練は積んだ。彼女の「また会えるよ」という言葉を信じていたから。

「再会したら必要になるかもしれない、とは思っていたけど……こんなに早く使うことになるとは」

うずくまっていた威昌沼が、脇腹を押さえて立ちあがる。

「ふ、ふざけ……やがって! ナメてんじゃねえぞ!!」

「まだやるのか?」

柎貴の経験からすると、彼らは威勢がいいだけで、格闘技の訓練を受けてもいないし、ケンカの数も踏んでいない。強い理由が見当たらなかった。

威昌沼が右手を広げて突き出す。

「ブツ殺すッ!!」

周りの男たちが顔色を変えた。

「ちよっ!? ヤバイッスよ、威昌沼サン?」「ソレやっちゃったら、いくらノイズアブリでも証拠が残っちゃうし!」「使ったら、本当に殺しちゃうよ……ッ!!」

怯えた声をあげつつ、じわじわと距離を取る。臆する連中に対して、威昌沼が怒鳴りつける。

「うるせえ! こんだけバカにされて、黙ってられるか!」

柩貴は顔をしかめる。

こういう手合いに理屈が通じないのは、わかっているが……

「殴られそうになって反撃したら、バカにしたことになるのか。身勝手な話だな」

「その態度がムカつくんだよ! お前の特有幻想がどんなもんか知らねえけど、使ってみせろ! 覚醒したばかりのやつが、俺に勝てるわけねえけどな!」

「む……」

これは、よくない。

彼はA組にいる。

もしも、アリスに近い能力を持っているとしたら、ただでは済まないだろう。

柩貴の特有幻想は戦いに使えるようなものではない。

血走った目で、威昌沼が絶叫する。

「死イイねッ!!」

掌からバスケツトボールくらいの大サイズの火球が現れた。

飛んでくる。

柩貴の顔面に迫った。

「あぶなあああああいッ!!」

階段を駆け上がったってきた人物が、横合いから飛び出してきて、その右拳を——火球に叩きつけた!

白い光に包まれた拳が、真っ赤に燃える火の玉を砕き散らす。

同時に、その拳から白い閃光が迸った。まばゆい光の矢となって、階段の壁を貫く。

轟音。

派手にコンクリートの破片が飛び散った。衝撃波が広がり、廊下のほうでガラスが割れる音があがる。

威昌沼の取り巻きの三人が悲鳴をあげ、這うように逃げていく。

外壁に穴が開いていた。

火球を砕いた右拳からは、うっすらと煙があがっている。

唐突に現れた人物が明るい髪をかきあげた。凜とした瞳で威昌沼を睨みつける。背が高いわけでもないのに、その堂々と立つ姿は大きなものに見えた。

「あんな、なにやっつてんの!？」

「あ、ぐ……さ、桜坂……さん……」

威昌沼がうめいた。

来てくれたのは、シャーリーだった。

火球の直撃をまぬがれて、柩貴は冷や汗をぬぐう。

「助かったよ」

「だいたいぶなの、柩貴!？」

「ああ、おかげさまで、かすり傷ひとつない」

朝の騒動で肩や脚には治療テープが貼ってあるが、この場では無傷だった。

よかった、とシャーリーが安堵する。

いくらか怒気を鎮めて。

「んで？ どういうことなの、威昌沼？ ちゃんと説明してもらおうからね!」

「いや……これは……そいつが、俺たちのことをバカにするから……」

「そんなこと柩貴はしらないと思うけど。まあ、悪く言われたんだとして。だから、本気で死なせるつもりだったわけ?」

ジロリと睨んだ。

威昌沼が乾いた笑い声をあげる。

「は、はは……そいつだってA組なんだから、あれくらいで死ぬわけないだろ？ なあ、

そうだよな？ だろ!？」

先程までとは真逆の、懇願するような様子だった。

正直、シャーリーが来てくれなかったら、どうなっていたかわからないけれど……

「ぼくは特有幻想のことは、よくわからない。そう言うなら、そうなのかもしれない」

知識がないのは事実だった。

もしかしたら、あの火球は幻影のようなもので無害だったのかもしれない。二発目を撃つてもらって確かめる気にはならないが。

シャーリーがうなずく。

「じゃあ、今回だけは見逃しとくわ。だけど、次に同じようなことしたら、絶対に容赦しないから! あんたが特有幻想を使うっていうなら、あたしが相手になってあげる!」

「かんべんしてくれよ、桜坂さん……レベル6の俺が、レベル7の君にかなうわけないじゃないか」

フキーツ!! とシャーリーが牙をむく。

「だから、あんたはダメだったの! レベルが上とか下とかじゃないの! 行いが正しいか間違ってるかって話なの!」

「ひっ!？」

彼女の迫力に押されて、威昌沼いじやうぬまが後ずさる。すっかり顔が青ざめていた。

「次に、こんなことがあったら、規律委員フレイカミとして逮捕させてもらおうから——ん？」
突き出した左手の環端末リングギアを見て、シャーリーが首をかしげた。

なにか気になることがあったのか。

シャーリーの言葉に、威昌沼が首をがくがくと縦に振る。

「わ、わかっている……ちよっと冗談が過ぎたよ。こんな悪ふざけは、もうしない……それじゃあ、また教室でな、桜坂さん!」

彼は言いながら、転げる勢いで去っていった。

唇を尖らせて見送りつつ、その姿が見えなくなると、シャーリーは環端末リングギアを見つめる。

「なくなってる……?」

「どうかしたのかい、シャーリー?」

「う、うん。水晶が……」



階段を上ってくる足音がした。

「ずいぶん、派手にやりやがったな、おい」

しかめっ面してやってきたのは、体育の授業を教えていた小学生みたいな先生だった。

「あ、みっちゃん!」

「緑川先生みどりかわって呼べて言ってるんだろ。またお前か、桜坂」

「にははっ」

「なにがあった? 環端末リングギアの記録を提出しろ」

「あ、はい!」

シャーリーが左腕を振って、環端末リングギアのウィンドウを開いた。

待っている緑川先生に、桎梏まじくは説明する。

「えっと、桜坂さんは、ぼくを助けようとして……」

「生徒の証言なんかいらん。自分に都合よく話すか、誰かをかばうか、どっちにしろ信用できねえ。アタシは環端末リングギアの記録を元もとに判断する」

「そ、そうですか」

なんにしても、シャーリーは悪いことをしていない。

桎梏まじくは話を引っこめた。

逆に、緑川先生のほうが尋ねてくる。

「そっういや、楠木くすのき。さつき規律委員会フレイカミへの登録申請が来たが、なんかの手違いか?」

「え?」

緑川先生が、めんどくさそうに、くしゃくしゃと頭をかいた。

「一応、説明しとくと、アタシは規律委員会プレレイカの顧問もやってんだよ。だるいけどな」
「あ、なるほど」

「申請は間違いか？ お前、転校初日だろ？」

「できれば何かお手伝いしたい、と思ってます」

先生が目をすがる。

シャーリーが作業中のウィンドウから顔をあげた。まるで餌えきをもらった仔猫みたいな顔をして。

「ほんと!? 柎貴も規律委員会プレレイカに入るの!? やった！ ねえ、ねえ、あたしとパートナーになろうよ！」

「えっ?」

「柎貴が来るって知ったときから、一緒にやりたいって思ってたんだ。あたしたち、子どものときから相性バッチリだったよね!」

「まあ、そうだったと思う……」

シャーリーが相手に突撃して、柎貴がフォローする形で、うまくやれていた。

今にして思えば、シャーリーが無意識のうちに特有幻想ディアルクトを発動していたから強かったのかもしれないが。

笑顔だった彼女が、「あっ」と表情を曇らせる。

「とと……柎貴とは組みたいんだけど、あたしってば、もうパートナーいるんだよね」

柎貴の聞きたいことは、まさにそれだった。

アリスは、あちらから離れていった、と言っていた。

しかし、シャーリーが自ら友達と縁を切るような性格だとは、どうしても信じられない。確かめたいと思っていた。

「そのパートナーとは、うまくやれてないのか?」

「にははっ、今、ちょっとケンカしちゃってるけど、すぐ仲直りするよ。なんか放っておけない子なんだ!」

「放っておけない? シャーリーのほうから離れていったりは?」

「しないよお。一年のときに組んでから、もう三十回くらいケンカして、何度もパートナー解消してるけど、やっぱり、お互いに必要としてると思うんだよね」

はにかむような表情が、すっと陰る。

「……あ、でも、なんでだろう? 水晶がなくなっちゃってただけ……故障?」

シャーリーが戸惑った様子で環端末を見つめた。

よかった——と柎貴は思う。

「やっぱり、シャーリーはシャーリーだな。きみは変わってない。友達を捨てて離れていくようなやつじゃない」

「にゃ? なになに? どういうこと?」

「今の話聞いて、ようやく状況が見えてきたよ」

つまり――

「ぐだぐだ話してんじゃねええええ！」

眉間にシワを寄せた緑川先生が、シャーリーの後ろに近づいてきた。

背後から両手で、シャーリーの胸をわしづかみにする！

たゆゆんっ。

「ぎにゃあ!？」

「桜坂、さっさと壁に穴を開けやがった事情を説明しろ！ 環端末リンツギマの記録を出せ！」

「んにあうう、わ、わかりましたあ、みっちゃん先生！ だから、胸はダメですううう」

「ムダにでかくしやがって！ 目障りなんだよ、おまえの前に立つと顔が見えないんだよ。

ふざっけんな！」

「にゃふう、なんで怒られてんのお？」

「出せ！ 出せ！」

「わあはあああいいいい!？」

目の前で、たわわな胸がぐにぐにと形を変えられる。

小さな手にいじられて、持ちあげられたり、寄せられたり、しぼられたり。

体操服だけに、制服のブラウス以上に、ふくらみの形がわかってしまう。

こいつは、目の毒だ。

証貴は理性を総動員して、視線を引きはがした。壁に開いた穴から外を見る。十二階く



らしい高さだと、隣のビルで視界が遮られて見晴らしはよくなかった。
なにを言おうとしていたんだったか？

そう、シャーリーのことだ。

シャーリーの――

「ふあんツ！ んはあツ！ せ、先生、ダメ……ダメです、おっばい、つぶれちゃうよお
おっばい。

違う！

そうじゃない！

柎貴は頭を左右に振った。

はうんはうん、というシャーリーの声を意識から追い出す。

話を整理しよう――

桜坂シャーリーはレベル7の幻想具現者で、規律委員会ブレイカーのメンバーだ。

委員会には二人一組という制度がある。シャーリーのパートナーは、アリス・クロック

ハートだった。こちらも、レベル7。

チーム名は《お助け猫》ヘルプキャットといったらしい。

朝、柎貴を襲ってきた針金男を追いこんだのは、アリス。そして、捕まえたのは、シャーリーだ。

あの空虚に抜けていく閃光せんこうを放ったのは、彼女だった。威昌沼の火球を砕いたとき、壁

に穴を開けた特有幻想サイケレムと同じだ。

「これだけなら、話はシンプルだったんだけどなあ……」

「はあ……はあ……はあ……」

ぐったりと、シャーリーが床にへたりこんでいた。くてつ、と脱力している。

目尻めじりに涙をためて、ウインドウを操作した。

「はあ……はあ……はあ……はい、送りましたあ」

「ケツ、三秒でやれっての」

どうやら、シャーリーと先生のやり取りは一段落したらしい。

柎貴は、まだ息を荒げている彼女に確かめる。

「シャーリーは、クロックハートさんとケンカしちゃってるんだよな？」

「はあ……うん？ そうだけど……あれ？ あたし、アリスの名前、言ったっけ？」

「いや、いろいろと事情があって……」

「そうなんだ？ あたしにもわかるように教えてほしいな」

「難題だな。えっと……まず、ぼくは……どうやら、レベル7らしい」

「へえ？ そうなんだ。さすが柎貴だね。それで？」

アリスに比べると、とても淡泊な反応だった。本当に彼女はレベルなんて数字としか思っていないのだろう。

「そのレベル7だとわかったせいで、クロックハートさんが声をかけてきてね」

先生の前でもあるので、授業中に校舎から出て喫茶店に行ったことや、軌道観覧車に乗ったことは端折る。

「とにかく、ぼくはクロックハートさんとパートナーの契約をしたんだ」

「ふえ？」

シャーリーが小首をかしげる。

理解できない、という顔をしていた。

「すまない。彼女とシャーリーが組んでいたなんて、そのときは気付いてなかったんだ。というか、あれが契約だったことも知らなかったんだけど……」

あの覇気に満ちたシャーリーが、まるで心ここにあらず。

ぽうぜん

呆然。

声は届いているだろうか？

「……………」

「大丈夫か？」

「そんな……だから、水晶が!？」

シャーリーが左腕を持ちあげて、環端末を見る。

薔薇のレリーフのある腕輪。そこに填っていた紫色の水晶が、今は空洞になっていた。

緑川先生が、ウインドウに表示された記録をチェックする。

「お前ら、朝の件でケンカして、パートナー解消してたじゃんか」

「でも、今までは、水晶、消えなかったのに!」

「そりゃ、桜坂もクロックハートも別のパートナーと契約しなかったからな。解消を宣言しても《解消可能》な状態になるだけで、正式な解消手続きをするか、別のパートナーと契約しないと、完全には切れねえんだよ」

「え……じゃあ……あたしと、アリス……本当にパートナー解消になっちゃったの?」

「クロックハートが楠木と契約したみたいだから——おい、桜坂のデータ、なんも記録されてねえぞ? 音も映像も」

先生の疑問など無視して、シャーリーが悲鳴をあげる。

「そんなああああ——!!」

「シャーリー、落ち着くんだ」

「うう……アリスとは、パートナー解消されちゃって……しかも、桎梏が、アリスのパートナーになっちゃって……」

「すまない。もっと調べてから話を受けるべきだった」

「なんか、すごく、うわああああ!! って気持ちだよお!!」

どうやら、いろいろな感情が渦巻いているらしい。シャーリーが頭をかかえて床に転がる。子どもみたいに。

「うわああああああ——ん!!」

「シャーリー、聞いてくれ。クロックハートさんと、よく話し合ってみよう」

「ふえ？」

「ぼくの聞いた話からすると、お互いに誤解があるように思う。まず会ってみるべきだ。長くパートナーとしてやってきたんだろ？ 大切なのは信じる気持ちだよ」

「う、うん……そうだよね！」

床に転がっていたシャーリーが起きあがろうとする。

そのお尻を緑川先生が踏んづけた。

「ふっとぶれすー！」

「ぎにゃああ!？」

ぐにぐに、と緑川先生の小さい足が、シャーリーのお尻を押し潰す。一応、靴を脱いでいるところが大人だ。

「お前、なんも記録されないじゃねえか！ 環端末のデータ、間違つてねえか!？」

「え？ あたし、さっきの三分間くらいの、ちゃんと送りましたよ」

「ああん？ どういうことだ？」

「やゝ、お尻、踏まないでくださいよ、みっちゃん先生え」

「そういえば——と柎貴は思い出す。

「威昌沼つてのが、環端末を使って記録を残さないようにする、とか言っていましたね」

「あ？ なんだそりゃ？」

「いや、ぼくも、よくわからないですけど……」

「威昌沼か……ちょっと話を聞いとくわ。お前ら、もう行っていいぞ。さっさと帰れ。なんか用事があるんだろ？」

「あ、はい！」

勢いよくシャーリーが起きあがる。

足を乗せていた緑川先生が、飛ばされた。

ぼーん、と。

「うぎやあああああああ——」

階段の下に落ちていく。

柎貴は、ギョツとしたが——先生がくるんと空中で一回転して、サーカスかと思うくらい華麗に着地した。

「このやろ、桜坂！」

「さようなら、みっちゃん！ また明日！」

「てめえ、この、てめえ！ 気をつけて帰りやがれー!!」

「はい」

変わったコミュニケーションを取る二人だった。

お互いに笑顔でいるから、きつとこれでいいのだろう。

柎貴は、シャーリーに腕を掴まれる。

「帰ろー！」

「うん……あっ、ちよっと、待った！ 制服に着替えはないのか!？」
 「ああ、そっか。そういや、カバンも教室だね！」
 更衣室と教室に寄ってから、柎貴はシャーリーと校舎を出るのだった。



浮遊学園都市カナンは、管理塔を中心として道路が放射状に広がっている。中央から伸びる幹線道路を円形の環状線が繋いで、蜘蛛の巣のような形になっていた。その幹線のひとつを走る通学バスに揺られること十五分。シャーリーの案内で辿り着いたのは、デザイナーズマンションの建ち並ぶ高級居住区だった。

外縁を囲む森林公園まで徒歩で三分といったところか。

駅前や中央の喧噪から離れた、静かな場所だった。

「クロックハートさんは、ここに住んでるのか？」

「うん」

ため息が出るような高級マンションだ。

本物がイミテーションかはわからないが、大理石の玄関に、複数台の監視カメラ。人工知能の受付が自動ドアを管理している。

しかも、玄関前には警備員がおり、シャーリーが「こんにちは！」と挨拶すると敬礼で応えた。

柎貴も会釈する。

シャーリーはインターホンを押すことなく、ドアの前に立った。

天井から電子音声が降ってくる。

『お帰りなさいませ、お嬢様』

今では人間の声と遜色ない合成音声は実現されているが、壁から生身の人間の声がするのはホラーだ、と誰かが気付いて以来、この手の人工知能には意図的にぎこちない電子音声が与えられていた。

「ただいま！ 今日友人がいるの」

「あ、こんにちは……」

『かしこまりました』

ここに来て、ようやく柎貴は気付いた。

「なあ、シャーリーもここに住んでるのか？」

「そうだよ。言わなかったっけ？」

「言っけないよ。クロックハートさんの家に行くとは聞いてたけど」

玄関をくぐりながら、あっ、と口を開ける。

「あたし、アリスと一緒に住んでるの。それも言っけなかったね」

「ルームシェアというやつか」
 「最初はアリスだけが住んでただけだね。あの子、放っておくと、学校にも来ないし、食事もしないし、ずっと音楽を聴きながらお茶してんのよ」

「はは……そんな感じだな」

浮世離れという言葉は生ぬるい。

柎貴には感情を見せてくれて、ようやく対話することができたが……初めて会ったときなど、彼女自身も特有幻想の産物かと思っただけだ。

シャーリーとエレベーターに乗り、最上階の三十階へ。

「カンンって背の高い建物が多いよな。エレベーターに乗るのも飽きてきたよ」

「土地が狭いもん。もう、どこに行ってもエレベーターだから慣れちゃった。あ、階段のほうがよかった？」

「エレベーター大好きだよ！」

「そう」

ちよっと残念そうな顔をされた。

必要とあれば、いくらでも階段ぐらい上るけど、今日は階段でのトラブルが続いているので、できれば避けたい。

最上階でエレベーターを降りると、もう目の前が玄関扉になっていた。

このフロアが、すべてアリスの部屋ということらしい。マンションというより高層ビル

の最上階にある一軒家といった趣だ。

柎貴にとっては、こんな造りのマンションがあることさえ新鮮な驚きだった。

人工知能がシャーリーを認識し、自動的にドアのロックを解除する。

「あがって、あがって、あがって」

「おじやます……」

シャーリーの家を訪ねるのは初めてではないが、他の女子の部屋に入ったことはない。

アリスの部屋でもあると思うと、少なからず緊張する柎貴だった。

分厚いコバルトブルーのドアの向こう側は、玄関というよりロビーになっている。赤と黒のチェッカー模様の絨毯が敷かれ、靴のまま入るようになっていた。

シャーリーが奥へと進む。

「アリス……!!」

柎貴は躊躇いがちについていく。

帰路のバスの中では落ち着いて見えたシャーリーだったが、やはり、パートナー解消のことが、かなり気になっている様子だ。友人の名を呼びながら、駆け足で奥に進む。

「アリス！ ちょっと、話があるんだけど！」

言いながら、ピアノのような光沢のあるミルク色の扉を開けた。

中は、お伽噺の世界だった。

白黒チェッカー柄の床に、壁は赤一面、白一面、黒一面、あとは窓。閉じられたカーテ

ンには大きな猫が笑っている。

天井には、夜空の星がまたたきプラネタリウムみたいになっていた。

大きなベッドと、鏡台がある。

鏡の前に座っているのは、金髪の女の子だった。

ちょうど湯上がりだったのだろうか、左手にクシを持っている。

空中に浮遊式ドライヤーが浮かび、髪に風を当てていた。

「……騒々しいです、シャリー。あなたは、いつも、そう——」

振り向いて、固まる。

シャリーの肩越しに、柩貫はアリスと目が合った。

彼女はショーツこそ穿いていたが、上すら着けていない、ほとんど生まれたままの姿だった。

流れる金髪に隠された胸元は、控えめながらも丸みを帯びてふくらみ、真っ白な肌は透き通る雪のよう。

芸術品のごときくびれに、聖地のようなおへそ。

肋骨の浮かぶ脇腹わきばらに小さなホクロがあった。

下腹部は水色のショーツでおおわれ、まるいお尻からは、触れたら折れてしまいそうなほど細い脚が、すらりと伸びている。

「……………」



微動だにしない彼女の姿は、よりいっそう人形のような印象を強めていた。もっとも、動けないのは柎貴のほうも同じである。

あまりのことに脳が固まっていた。

「あれ、どうしたの？ 柎貴？ アリス？ もしもしい？」

ぱたぱたと手を振る。

わずかに早く意識を取り戻したのは、柎貴だった。あわてて視線を引きちぎり、部屋の中が見えない位置へと引っこむ。

「ご、ご、ごめん!!」

謝罪の言葉への返事は――

アリスの悲鳴だった。

ただし、破壊音を伴って。

部屋から馬の首が飛び出してきた。

チェスの駒だと気付いたのは、すこし経ってからだ。

クルマに撥ねられたかのように勢いよくシャーリーが吹っ飛ばされる。

「ぎゃんっ!!」

廊下の壁に叩きつけられた。

柎貴は思わず叫ぶ。

「シャーリー!!」

「来ちゃ、ダメ!」

制されて、柎貴は駆け寄りかけた足を止めた。

部屋からアリスの絶叫が聞こえる。

「いやあああああああああああ——!!」

時計の針の音がした。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ……

どこからか、ギイ……と扉の軋みが聞こえる。

Puooo〜というラッパの音がした。騒がしい歌声や大勢の笑い声が、だんだんと大きくなる。

《妖精進撃》がやってきた。

最初に現れたナイトは、いつの間にか消えていて、続いてポーンとピシヨップとルークが、アリスの部屋から飛び出してくる。柎貴よりも大きいくらい巨大なチェス駒たちだ。先ほど吹き飛ばされたシャーリーが、壁に片手をつけて立ちあがる。不敵に笑って拳を構えた。

「こんのおおお、砕き散らせ! あたしの拳!! スタアアア、ブラストオ——ッ!!」

まばゆい輝きを放つ右拳を叩きつける。
チェス駒を砕いた！

「ちえいあああ——ッ!!」

アリスの部屋から溢れ出る特有幻想の妖精たちを、情け容赦なく粉碎していく。

柩貴は啞然として、唐突に始まった異能力による戦いを見つめていた。

衝撃波が広がり、壁や床にヒビが入る。

あわてて叫ぶ。

「な、なあ、それ危なくない!? 部屋が壊れちゃうんじゃない!?」

「そうだよ！ 落ち着きなよ、アリス！」

「あなたが悪いんです！ シャーリーのバカ!!」

「なんですとお!? バカって言ったほうがバカだからね!」

まるつきり、子どものケンカだった。

ただし、被害は尋常ではない。

「待つんだ、シャーリーも落ち着いてくれ！ そもそも、ノックしなかった、きみも悪いんだし……」

「うっ!」

何十体目かの幻想の存在を殴り倒したシャーリーが、うめき声をあげた。

柩貴はアリスにも声をかける。

「クロックハートさん、約束もしないで来て悪かった！ 迷惑なら、ぼくは帰るから、もう怒らないで欲しい!」

「……………」

ようやく、幻想の妖精たちが溢れ出してくるのが止まった。

すさまじい子どものケンカもあったものだ。

ひどい状況になっている。

壁も床もボロボロだ。

特有幻想の持ち主たちを人々が浮遊学園都市に隔離したのもうなずける惨状だった。



ひと昔前のビルなら、建て直しが必要になっていた。

しかし、このマンションは幻想具現者が暴走したときを想定した頑強な造りで、フロアごとの交換修理が可能な設計であるらしい。

三十階部分を丸々交換する、とのことだった。管理者が妙に慣れた様子だったから、もしかしたら、こんなことが頻繁にあるのかもしれない。

結局、柩貴たちは二十七階にある別室へ移動することになった。

「クロックハートさん、ひとつ訊きたいんだけど……」

「……なんででしょうか？」

柎貴の問いに、アリスが目を合わさずに答える。

「何階ぶんの部屋を借りてるんだい？ あ、分譲なのかな？」

「……一階から三十階までです」

「全部!? このマンション、全部がクロックハートさんの家!？」

アリスがうなずいた。

シャーリーが説明を付け足す。

「最初は一軒家だったの。だけど、アリスは周りが騒がしいのが苦手だし、こんなふうな部屋が壊れちゃうことがあるからさ」

「……壊す人がいるのです」

「あたしのせい!? いつも糞糞を起こして幻想具現化すんのは、アリスでしょうが!」

「……マンションの壁は対幻想装甲で要塞化してあります。この壁を壊すのは、いつもシャーリーです」

「なにおう」

柎貴は呆れてしまう。

「せめて、家を壊さないように抑えられなかったのか？」

「……手加減は苦手です」

「特有幻想って、イメーজだから、強くすると同じくらい、弱くするのも難しいんだっ

て。先生が言った」

「なるほど。それなら、なおのこと、もうケンカはしないほうがいいよ」

「は〜い!」

「……何部屋も潰す気はないです」

案内された二十七階のリビングは、さすがに被害が出ていなかった。

本棚のうえに置かれたヌイグルミが倒れていたくらいで、それもアリスの手によって起こされる。

タキシードを着たウサギで、手には時計を持っていた。よく見たら、最近では珍しいアナログ時計になっている。

部屋には、静かなクラシック音楽が流れていた。オーケストラではなくヴァイオリンの独奏だ。

三角形のテーブルには、ティーカップが三つ、ティーポットが一つ用意された。

アリスは貝殻を開いたような形の座椅子に腰掛ける。シャーリーは座布団も使わず絨毯にべた座り。

柎貴にはやわらかいクッションが与えられた。

黙りこくったアリスの顔には「不機嫌」と書いてあるかのようだ。

当然ながら、もう服は完璧に身につけている。朝着ていた青いドレスではなく、今は白黒チェッカー柄のジャンパードレスに半袖のブラウスを合わせていた。胸元には赤いリボ

ンを結んでいる。

「儼然とした表情のままアリスが紅茶を口にする。

「……柎貴くん」

「なに？」

「先ほど、あなたは何も見ていません……いいですね？ 見ていません」

「あ、ああ……そうだね。もちろん」

「よろしい」

うなずくと、アリスは表情を隠すようにうつむいてティーカップを口元へ運んだ。

そして、話題を転じる。

「……シャーリーは、ディアルクトの名称を叫ぶの、どうにかならないんですか？ 子どもじみてると思います。恥ずかしいです」

「いつも言ってるけど、必殺技は名前を叫ぶものなんだよ」

「非論理的です。理解できません」

「アリスこそ、もっと順番を考えて妖精を出しなよ——あ、お菓子ある？ 盾になる妖精を最初に出して、左右から速いやつで囲むとかさ」

「シフォンケーキを買っておきました……いつも言っていますが、妖精たちは勝手に出てくるのです」

シャーリーが冷蔵庫を開けて、ケーキを取り出す。

「おっ、三人ぶんあるじゃん！ ナイス！ せっかくの必殺技なんだから、コントロールを覚えなってる」

「フォークも持ってきてください……シャーリーこそ不必要に光を飛ばすのは、やめるべきです」

「にははっ、なんか殴ると飛ぶんだよね！ はい、フォークね。こっちが柎貴のぶん」

「ありがとう、と言って受け取る。」

シャーリーが座って、三人ともシフォンケーキに手をつける。

「ん……なかなかの味です……シャーリーのせいで、また部屋がダメになりました。ちゃんと弁償してください」

「えええっ!? 元はといえば、アリスが《ワシダーカーニバル妖精進撃》を使ったせいでしょ？ ふわあ、これ美味しいね」

しばらく、二人とも会話を中断してケーキを食べる。

柎貴も頂戴することにした。

たしかに美味しい。これほどの店が近くにあるとは侮れない。アリスにクレームブリュレの味を誇った柎貴だったが——もっと精進せねば、と思う。

半分ほど食べたアリスが、またティーカップを傾けて。

「元はを言うのなら……ノックもしないでドアを開けたシャーリーにこそ、非があります」

「ノックしないのなんか、いつものことじゃん？」
あつという間に皿を空にしたシャーリーが、ほどよくぬるくなった紅茶を一気に飲み干す。

いつもなのか——と柗貴は内心でツッコミを入れたが、口にはしなかった。
アリスが横目で、チラリとこちらを見た。

「……いつもは……柗貴くんがいません」

「ああ、そう！ 話、聞いたよ！ どうして、柗貴とパートナー契約したわけ!?!」

「……わたしとしては、シャーリーが柗貴くんと親しげであることが不思議です。今日、転入してきたばかりのはずなのに」

「あたしら幼馴染みだもん」

「……え？」

柗貴はうなずいて、話を引き取る。

「ぼくたちは同じ小学校に通ってたんだ。七年前にシャーリーだけがカナンに転校して、今になって、ぼくも」

シャーリーが頬を膨らませる。

「なにも言わずに、パートナーを替えちゃうなんて、ひどいじゃないの、アリス！」

「………シャーリーのほうから『解消』を宣言したはずですよ」

「そんなの、よくあることじゃん！ いつも、晩ご飯には仲直りしてるじゃん！」

「……そう思ってるのは、あなただけです……いつも、すっかり忘れたような顔をしているから仕方なく合わせていました」

「えっ!? じゃあ、あれやこれや、まだ気にしてたの？ 三十回ぐらいの、ぜんぶ？」

シャーリーが何かを思い出すように、視線を彷徨わせる。

アリスがため息をついた。

「……今朝で、三十六回目です。去年、パートナー契約をしてから……三十六回も解消しました」

「ちょっと待った！ アリスのほうから言い出したこともあるよね!?! なんか、あたしだけ一方的に悪い感じになってない!?!」

「シャーリーが壊しすぎるせいで、いつもわたしまで怒られます」

「今朝、教室をダメにしたのは、あなたのバカ猫とバカ鳥でしょうが!」

「ひどいです……シャーリーにだけは、バカなんて言われたくありません……!」

「よくわかんないけど、今のは悪口だ！ そんな感じがした！ ふきー!!」

ギヤイギヤイと言い争う。

とりあえず、ディアレクト特有幻想をぶつけ合うようなケンカではないので、柗貴は放っておいた。
ゆっくりとケーキと紅茶を味わう。

口のなかに広がるシフォンケーキのほどよい甘味と、鼻孔に抜けるベルガモットの香り。
至福！

「ああ、美味しいなあ」

「柎貴も、ちゃんと聞いててよね！」

シャーリーが目逆三角にする。

アリスも睨みつけていた。

「……部外者のような顔をしていました。疑問です」

「ん？ もう話してもいいのか？」

「なにか言いたいことがあるなら、遠慮しないでいいのに」

「……生きて帰りたければ、言葉を選んだほうがいいです」

二人が見つめてくる。

思わずたじろいだ。

睨まれて恐いということはなく、むしろ、逆というか……

どこまで本人たちに自覚があるのかわからないが、アリスとシャーリーは柎貴が今までに会った誰よりも容姿が際だっている。アリスの青玉のような瞳と、シャーリーの琥珀色の瞳が並ぶと、なおさらだ。

柎貴は照れてしまって、つい視線を逸らした。

「えっと……ま、まず、過去のいざごさについては、ぼくは知らないし……水に流せとも言わないよ。でも、いろいろあっても同居してるくらいだ。そこまで仲が悪いわけじゃないんだろ？ 完璧な人間なんていないだし、許してあげられないもんなかな。お互いに」

「む……」

アリスが考えこむ。

シャーリーのほうは、けろりとしていた。

「あたし、そもそもケンカの原因とか、いちいち覚えてないんだよね」

「きみはそういう性格だね」

「にははっ」

「くっ……わたしは独りで悩んでいたというのに」

アリスが疲れたような声を出した。徒労感が漂っている。

「それじゃあ、過去のことは置いておくとしよう。次は、現状の確認だ——ぼくは、アリスのパートナーとして契約しており規律委員会に《予備登録》されている。緑川先生にお願いしておいたから、もしかしたら、もう正式に登録されるかもしれないけど」

「……わたしは、柎貴くんのパートナーであり、当然ながら、正式な規律委員です」

ふふっ、とアリスが嬉しそうな笑みを浮かべる。

花が咲くような微笑み。

この表情には見覚えがあった。柎貴の手持ちが少ないと話したときの、アレだ。咲く花は、きつと黒い薔薇だろう。

シャーリーが苦いものを嚙んだような顔をしていた。

「ううう……あたしはパートナーじゃないし、たぶん、規律委員会も予備登録か支援隊になっ

ちゃってるよ。二人一組って決まりだから」
 「ふふっ……柎貴くん、どうかしら？ この紅茶、なかなか香りがいいでしょう……イン
 グランドの専門店から取り寄せています」

「えっ、そうなのか。どこの店だい？」

「フォートナム&メイソンです」

「それ英国王室御用達の高級店じゃないか。すごいな」

「ちよっ!? あたしの話、聞いてた!? あたし、けっこう寂しい状況じゃない？ 二人が
 何を話してるかもわかんないし」

シャーリーが涙目だった。

アリスのほうは、いつになく上機嫌だ。

「……紅茶について話せる相手がいるのは悪くありません。シャーリーなんて、なにを飲
 ませても同じです」

「ええっ!? 美味しいかどうかは、わかるよお！」

「そこの店でティーバッグの紅茶を飲んでも、美味しい」としか言わないです」

それは酷い、と柎貴は思う。

「茶葉は良くてティーバッグが悪いとは言わないけど、さすがに味は別モノだろう」

「わ、わかるもん！ だけど、美味しいのは、美味しいでしょ!？」

「……では、今日の紅茶はどちらだったかしら？」

「うっ!？」

シャーリーがたじろぐ。

そういうえば、ケーキを食べた勢いそのまま豪快に流しこんでいた。あれでは、味わいもな
 にもないだろう。

柎貴は苦笑する。

「まあ、いいじゃないか。テイステイングより、美味しいという一言のほうが、ぼくは大
 切だと思うよ」

「……それは、そうですが」

「じゃあ、現状を確認できたということ——最後に、これからの話をしよう。はつきり
 言って、ぼくの特有幻想ディアレククトは、きみたちのような実用性のあるものとは根本的に違うんだ。

カナンに来て、他の人のを初めて見て、正直、驚いてるよ」

子どもの頃に、シャーリーの特有幻想ディレクは見ていたのかもしれないが、それを理解でき
 いなかった。右拳ミキエが光ったり、閃光フラッシュが飛んだりはしなかったし。

「……根本的に違うというの……戦闘向きではない、ということですか？ 移動系とか
 探索系？」

「それはそれで使えるんじゃない？」

彼女たちの言葉に、柎貴は首を横に振った。

「いや、そういうのとも違う。とにかく、特有幻想ディレクで規則違反者を捕まえるのは、ぼくに

は無理だと思う。だから、規律委員会レギュレーション委員会の仕事は、今まで通りにクロックハートさんとシャーリーが組んでやったほうが効率的なんじゃないかな?」

二人が顔を見合わせる。

つん、とアリスが視線を外し、シャーリーが唇を尖らせた。

「……それは、柎貴さんとパートナーを解消して、シャーリーと契約しろという意味かしら? わたしと組みたくないなら、回りくどい言い方をしなくてもいいです」

「ぼくは、クロックハートさんを選んでもらって光栄に思ってるよ」

「……それ」

「えっ?」

「……おかしいです」

「なにが?」

ジトツとアリスが睨んでくる。

「……シャーリーは名前で呼ばれています。わたしも柎貴くんを名前で呼んでいます。なのに、どうして、あなたはいつまでも、クロックハートさん、なんですか? 暗に距離を置きたいという意味ですか?」

「いやいやいや、それは……今日、会ったばかりだし……」

「いいんです……王というのは孤高なものです」

彼女が窓の外へと視線を流した。

シャーリーが、ケラケラと笑いだす。

「あははっ、アリスってば、まだ王とか言ってるの!」

「……事実ですから。パートナーに名前で呼ばれないくらいには孤独な——」

柎貴は降参を認めた。

疎遠にしたくて、苗字みょうじで呼んでいたわけではない。

「ああ、わかった! ぼくとの契約のことはともかく、名前で呼ばせてもらうよ!」

「……当然です。シャーリーは名前で呼んでるんですから、わたしのことも名前で呼ぶべきです」

妙なところで対抗心を燃やしている。

もしかしたら、とんでもなく負けず嫌いなかもしれない。

シャーリーのことは、子どもの頃から名前で呼んでいるから慣れてはいるが、女子を名前で呼ぶなんて落ち着かない。

とはいえ、今さら恥ずかしいとは言えない雰囲気だった。

「じゃあ……えっと……ア、ア、アリス……さん」

「……さん?」

「あ、いや——ア、アリス……どう、かな? これでいいかい?」

顔が熱くなる。

言わせておいて、彼女のほうも頬ほおをほんのり染めていた。

「……はふう……これは、思った以上に……」
 「どうした？」

「……いえ。まったく問題ないです。あるはずがありません。絶対に」
 アリスが顔を赤くしたまま澄まし顔をするが、かすかに口元がひくついていた。
 シャーリーが、柎貴まきの肩をつついてくる。

「ね、ね！」

「ん？ どうした？」

「なんか、今みたいな感じで、あたしの名前も呼んで！」

「名前？ どういう意味があるんだい？」

「いいから！」

「んん？ シャーリー……これでいいのかな？」

「違うよ！ なんか、ぜんぜん違うよ！」

意味がわからなかった。

話が延々と脱線しそうだったので、軌道修正する。

「とにかく、パートナー契約のことだ。移動中に規律委員会レイカの規則をチェックしたけど、支援隊サポーターズなら一人でも大丈夫らしい。ぼくには、そっちのほうが向いてる気がする」

「あ、じゃあ、あたしと一緒に、そっちでがんばろうか？」

シャーリーの提案に、アリスが囁みつく。

「あんなのは下働きです。レベル7のやる仕事ではありません」

「下働きじゃないよ。いつも言ってるけど同じ委員会の仲間だよ。役割が違うだけ」

「……わたしのパートナーを奪う気ですか、シャーリー？」

「奪う？ 言わないでおこうと思ってたけど、やっぱり言わせてもらう！ 柎貴のこと、騙だまして契約したでしょ!」

「……………なにを言っているのか非論理的です」

アリスが表情を隠すようにティーカップを口元へ持つていく。

ピシッとシャーリーが指さした。

「ごまかした！」

「柎貴くん、おかわりはいかがですか？」

「ちよっと、アリス！ 柎貴は、あたしの幼馴染おきななじみで、学園の案内だって、あたしが先に約束してたのに!」

「……幼馴染みだからといって所有物ではないでしょう……それとも、婚約でもしているのですか？」

「なっ!」

シャーリーが絶句する。カアツ、と頬が赤くなった。

「いや、そういう約束とかは、べつに、してないっていうか、柎貴とは、そういうんじゃないっていうか……」

「……そ、そうでしようとも」

言っておいて、アリスのほうも恥ずかしそうな顔をしていた。

柩貴はティーカップをソーサーに戻す。わずかに、キンと涼やかな音がした。ちようどクラシックの曲が変わる。

「きみたちは、本当に話題の脱線が多いな」

「……シャーリーが悪いんです」

「女の子なら普通だよ！」

「ぼくの提案はどうなるんだい？ アリスとシャーリーが組んだほうが、うまくいくと思っただけ」

「……前提に疑問があります。柩貴くんは特有幻想ディアレククトについて知識に乏しい。レベル7と判定されておいて実用性がないというのは、説得力がありません」

「あっ、そうだよね！ 見てみないとわからないよ」

二人の意見は、もっともだ。

柩貴は腰をあげる。

「わかった。危険なものじゃないから、今から見せよう」

「手品ショーみたいでわくわくするね」

「……屋上に出ますか？」

「大丈夫。あと、手品はできないよ。まあ、満足してもらえればいいんだけど……」

深呼吸する。

目を閉じて、しばらく集中の時間が必要だった。

柩貴はオーケストラの指揮者のように両手をあげる。

「ようこそ——」



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！